

ニ公告スヘシ

國立銀行條例畢 (國立銀行成規ハ畧之)

明治十二年十月三日大藏省御達

國立銀行

(八十四) 銀行ヨリ振出スヘキ事

振出手形ノ儀ハ自今左ノ通り相心得發行可致此旨相達候事
第一 此手形ハ一枚ノ金額百圓以上タルヘシ
第二 此手形ハ振出シタル年月日及預ケ主ノ姓名ヲ記入シ授受ノ際ハ必ス裏書ヲ要スヘシ
第三 此手形ニ對シテハ利息ヲ付ス可カラス
第四 此手形ハ發行店ノ外其仕拂ヲナス可カラス但賣買割引ハ此限ニアラス
第五 此手形ハ銀行紙幣並ニ預リ金ノ準備トナスヲ得サルハ勿論金銀有高ニ算入ス可カラス

(八十五) 國立銀行條例改正追加

明治十一年三月二日御布告第五号

明治九年(八月)第百六号布告國立銀行條例第十八條左ノ通改正シ明治十年(十二月)第八十三号布告同條例追加取消候條此旨布告候事
第十八條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行スル紙幣ハ資本金十分ノ八タルヘシ然レハ大藏卿ハ全國ニ發行スヘキ銀行紙幣ノ物額ヲ制限スルコトアルヘシ故ニ新クニ創立ヲ願フ者アルキ其資本金額ヲ節減シ或ハ其創立ヲ許可セサルコトアルヘシ尤モ發起人ノ請願ニ依テハ特ニ其發行紙幣ノ割合ヲ節減シテ其創立ヲ許可スルコトアルヘシ而シテ各銀行ハ其發行紙幣ノ高ニ應シ四朱以上利付ノ公債証書ヲ時價(時相場ヲ勘酌シ大藏省ニ於テ定ムル所ノ價格)ヲ以テ右紙幣ノ抵當トシ之ヲ出納局ニ預クヘシ但公債証書ノ時價低下スルキハ其銀行ニ命シテ更ニ他ノ公債証書ヲ納メシメ其發行紙幣ノ額ニ充タシムヘシ

(八十六) 國立銀行條例改正

明治十一年十月一日御布告第三十一号

明治九年(八月)第百六号布告國立銀行條例第五十七條左ノ通改正候條此旨布告候事

行條例改正

第五十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ貸付金利息ハ政府ニ於テ定メタル一般ノ利息制限法ニ準據スヘシ若シ其限ニ超過スルモノアル時ハ大藏卿ハ其銀行ヲ督責シテ之ヲ其制限ノ割合ニ引直サシムヘシ

(八十七) 國立銀行稅額

明治十一年九月廿八日御布告第二十九号

明治九年(八月)第百六号布告國立銀行條例第十五章稅額ノ儀ハ銀行紙幣下付高ノ千分ノ七ト相定メ本年七月ヨリ年々徵收候條此旨布告候事但シ納期ノ儀ハ一ケ年兩度ニ割合半年分ハ七月三十一日限リ後半年分ハ一月三十一日限リ其管轄廳ニ可相納事

明治十三年二月廿七日大藏省御達乙第十二号

府 縣

(八十八) 日本銀行條例

明治十五年六月廿七日御布告第三十二号

地方官ニ於テ銀行檢査ノ爲メ官員ヲ派遣候節ハ自今必ス其廳ノ命令書ヲ附與シ若シ銀行ヨリ之カ視閲ヲ請ヒ候節ハ無異議相示シ候様可致此旨相達候事但東京府ハ此限ニ非ラス
日本銀行條例左ノ通制定ス

日本銀行條例
第一條 日本銀行ハ有限責任トシ本行ノ負債辨償ノ爲メ株主ノ負擔スヘキ義務ハ株金ニ止マル者トス
第二條 日本銀行ハ本店ヲ東京ニ置クヘシ各府縣ノ首邑其他要用ナル地方ニ支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コレレスボンデンス」ヲ締約スルヲ得但支店出張所ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コレレスボンデンス」ヲ締約スルキハ其事由ヲ大藏卿ニ具狀シ其許可ヲ受クヘシ又大藏卿ニ於テ支店出張所ヲ要用ナリトスル時ハ銀行ニ命メ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ
第三條 日本銀行ノ營業年限ハ開業ノ日ヨリ滿三ケ年トス但株主總會ノ決議ニ依リ營業ノ延期ヲ請願スルコトヲ得
第四條 日本銀行ノ資本金ハ壹千萬圓ト定メ之ヲ五萬株ニ分チ一株二百圓トス但株主總會ノ決議ニ依リ資本金ノ増加ヲ請

第十三 銀行之部

八十三

願スルヲ得○第五條 日本銀行ノ株券ハ總テ記名券トナシ日本人ノ外賣買讓與スルヲ許サス○第六條 日本銀行ノ株主トナラントスル者ハ大藏卿ノ許可ヲ受クヘシ○第七條 資本金總五分ノ一即チ貳百萬圓ノ入金アルキハ營業ヲ開始スルヲ得ヘシ但シ資本金募集ノ手續ハ定款ヲ以テ定ムル者トス○第八條 營業上ニ於テ損失ヲ生シ資本金現入金額ノ内幾分ヲ減少シタルキハ其事由ヲ審明シ資本入金ノ増加ヲ要スル時ハ之ヲ資本入金額ヨリ追募ス可シ○第九條 事業ノ伸張ニ依リ資本入金ノ増加ヲ要スル時ハ之ヲ資本入金額ヨリ追募ス可シ○第十條 純益金總額ヨリ株主割賦金ヲ引去リ其殘額ヨリ少ナクハ十分ノ一ヲ左ノ目的ヲ以テ積立金ト爲スヘシ○第一 資本金ノ損失ヲ補フ○第二 割賦金ノ不足ヲ補フ○第十一條 日本銀行ノ營業ハ左ノ如シ○第一 政府發行ノ手形爲換手形其他商業手形等ノ割引ヲ爲シ又ハ買入ヲ爲ス事○第二 地金銀ノ賣買ヲ爲ス事○第三 金銀貨或ハ地金銀ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事○第四 豫テ取引約定アル諸會社銀行又ハ商人ノ爲メニ手形金ノ取立ヲ爲ス事○第五 諸預リ勘定ヲ爲シ又ハ金銀貨貴金屬並諸証券類ノ保護預リヲ爲ス事○第六 公債証券政府發行ノ手形其他政府ノ保証ニ係ル各種ノ証券ヲ抵當トシテ當座勘定貸又ハ定期貸ヲ爲ス事但其金額及利子ノ割合ハ總裁副總裁理事監事ニ於テ時々決議シ大藏卿ノ許可ヲ受クヘシ○第十二條 日本銀行ハ第十一條ニ記載スル事業ノ外左ニ掲グルル件々ハ勿論其他諸般ノ營業ニ關涉スルコトヲ得ス○第一 不動産及ヒ銀行又ハ諸會社ノ株券ヲ抵當トシテ貸金ヲ爲ス事○第二 本銀行ノ証券ニ對シテ貸金ヲ爲シ又ハ株券ノ買戻ヲ爲ス事○第三 諸工業會社ノ株主タルハ勿論直接間接ヲ問ハス關係スル事○第十四條 本支店出張所ヲ開設スル爲メ必要ナル者ノ外一切他ノ不動産ノ所有主タル事○第十三條 政府ノ都合ニ依リ日本銀行ヲシテ國庫金ノ取扱ヒニ從事セシムヘシ○第十四條 日本銀行ハ兌換銀行券ヲ發行スルノ權ヲ有ス但此銀行券ヲ發行セシムル時ハ別段ノ規則ヲ制定シ更ニ頒布スル者トス○第十五條 日本銀行ハ諸手形及ヒ切手ヲ發

行スルヲ得ヘシ○第十六條 日本銀行ハ公債証券ヲ買入レ又ハ之ヲ賣拂フコトヲ得ヘシ但此場合ニ於テ大藏卿ノ許可ヲ受クヘキモノトス○第十七條 日本銀行ハ總裁一人副總裁一人理事四人ヲ以テ綜理スルモノトス此外ニ監事三人乃至五人ヲ置クヘシ○第十八條 總裁副總裁ハ任期五ヶ年トシ總裁ハ勅任副總裁ハ奏任トス但任期中他ノ官職ヲ兼任スルヲ得ス○第十九條 理事ハ株主總會ニ於テ選舉シ大藏卿ノ命スル者トス但創立第一回ハ五ヶ年ノ任期ヲ以テ大藏卿之ヲ特命ス可シ監事ハ株主總會ニ於テ之ヲ選舉シ理事監事ノ任斯ハ定款ヲ以テ定ムヘシ○第二十條 理事監事ハ任期中他ノ銀行又ハ會社等ノ役員タルヲ許サス○第二十一條 大藏卿ハ特ニ監理官ヲ日本銀行ニ派遣シテ諸般ノ事務ヲ監視セシムヘシ○第二十二條 日本銀行ハ本支店出張所及ヒ約定店等ノ營業上自般ノ景況ヲ査調シ少クモ毎月一回之ヲ大藏卿ニ報告スヘシ○第二十三條 日本銀行ハ本條例ノ趣旨ニ基キ銀行定款ヲ作り政府ノ許可ヲ受ク可シ但シ定款ヲ改正シ又ハ定款外ノ事ヲ處スル時ハ株主總會ニ於テ決議シ政府ノ許可ヲ受クヘシ○第二十四條 政府ハ日本銀行諸般ノ業務ヲ監督シ其營業上條例定款ニ背戻スル事ハ勿論政府ニ於テ不利ト認ムル事件ハ之ヲ制止スヘシ○第二十五條 此條例ヲ改正增削スル時ハ其施行ノ日ヨリ三ヶ月以前ニ之ヲ布告スヘシ○右奉 勅旨布告候事

明治十六年五月五日御布告第十四号

(八十九) 銀行條例改正 加除

明治九年(八月)第百六号布告國立銀行條例中左ノ通改正加除ス
第十二條 此條例ヲ遵奉シテ創立スル銀行ハ鎮店其他ノ事故アルニ非サレハ開業免狀ヲ受ケシヨリ二十ヶ年ノ間其營業ヲ繼續スル事ヲ得ヘシ右期限後ハ更ニ私立銀行ノ資格ヲ以テ大藏卿ノ許可ヲ受ケ其營業ヲ繼續スルコトヲ得ヘシ然レ紙幣發行ノ特許ヲ有シ國立銀行ノ資格ヲ以テ營業ヲ繼續スルコトヲ許サス○第二十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其紙幣下付高四分ノ一ニ相當スル通貨ヲ以テ發行紙幣引換ノ準備ニ充ツヘシ○第二十二

第十三 銀行之部

條 削除○第二十七條 但書削除○第四十九條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣ヲ通貨ト引換ヘンコトヲ請求スルモノアルトキハ日本銀行ニ於テ之ヲ引換フヘシ○第六十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ニ於テ預リ金ノ返濟又ハ爲換手形約束手形等ノ仕拂ヲ爲スニ當リ兼テ積置キタル準備金ヲ以テ之ヲ償フヲ能ハサルキハ其銀行ノ株主等ハ各其所持ノ株數ニ應シ別ニ出金シテ一時之ヲ償辨スルノ責ニ任スヘシ但此出金ハ全ク一時辨償ノ爲メニシテ其株金ト異ナルヲ以テ其銀行ハ速カニ之ヲ各株主ニ返辨スヘシ

第八章 利益金分配ノ方法ヲ明カニス

第七十九條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役等ハ每半季其銀行ノ總勘定ヲナシ其總益金ノ内ヨリ諸雜費並ニ損失補償ノ金額及ヒ滯貸金ノ準備ヲ引去リ其餘ヲ以テ純益金トナシ之ヲ總株主ヘ分配ス可シ尤右利益ノ計算ハ株主ニ分配セサル前十日以内ニ(郵便遞送日數ヲ除ク)大藏卿ヘ差出シ其承認ヲ得テ後之ヲ株主一同ヘ通知シ且新聞紙ヲ以テ世上ニ公告シ而シテ之ヲ株主一同ヘ分配スヘシ但懣カナル抵當物或ハ確實ナル引受人アル貸付金ヲ除クノ外其返濟期限ヲ過クルコト六ヶ月以上ニ及フモノハ都テ之ヲ滯貸金ト看做スヘシ○第八十條 削除○第八十三條 國立銀行ノ役員タル者諸相場ニ關シ投機ノ商業ニ從事スルトキハ大藏卿ハ銀行ニ命シ其役員ヲ退職セシムルコトアルヘシ

第十二章 官命鎖店ノ場合特別監督役跡引受人等ノ取扱方並ニ公債証書ノ没入及ヒ紙幣引換等ノ手續ヲ明カニス

第九十二條 削除○第九十三條 國立銀行ニ於テ左ニ掲ケル事跡アルトキハ大藏卿ハ鎖店ヲ命スルコトアルヘシ○第一 國立銀行條例ノ趣旨又ハ箇條ニ背戾シ大藏卿其銀行ヲ鎖店セシムルヲ相當ナリト思考スルトキ○第二 國立銀行ニ於テ負債辨償ノ義務ヲ盡ス能ハサル証據アルトキ○第三 國立銀行ニ於テ其資本金總額十分ノ五以上ノ損失ヲ生スル

トキ○第九十四條 前條ニ記載スル事故アリト認ムル時ハ大藏卿ハ檢査ノ官員ヲ派遣シ其事實ヲ推糺セシメ若シ相違ナキニ於テハ都テ其銀行ノ營業ヲ差止メ金銀其他ノ出納ヲ禁スヘシ○第九十八條 此條例第九十六條ニ據リ其銀行ヨリ没入シタル公債証書ハ大藏省ノ便宜ニ從ヒ之ヲ公賣若シクハ私賣シ以テ其銀行ノ發行紙幣引換ノ資ニ充ルモノトス但右公債証書ノ賣却代價紙幣下付高ニ對シ不足アルトキハ大藏卿ハ他ノ債主ニ先チ之ヲ其銀行ノ資産ヨリ徴収シ若シ下付高ニ對シ過剩アルトキハ之ヲ其銀行ニ下付スヘシ○第一百三條 此條例ヲ遵奉スル銀行鎖店ノ場合ニ於テ跡引受人ノ入費等ハ都テ相當ノ處分ヲ以テ大藏卿之ヲ取極メ他ノ債主ニ先チ其銀行ノ資産ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

第十六章 銀行紙幣消却ノ方法ヲ明カニス

第一百十二條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ハ左ニ掲ケル方法ヲ以テ其營業年限内ニ悉皆消却スヘキモノトス但其取扱手大ハ續藏卿之ヲ定メ日本銀行ヲシテ之ニ從事セシムヘシ○一 各國立銀行ノ紙幣引換準備金ハ大藏卿ノ指定スル期限迄ニ日本銀行ニ納付シ營業年限内ニ之ヲ定規預ケトナシ以テ紙幣消却ノ元資ニ充ツヘシ○一 各國立銀行ハ每半季利益金ノ多少ニ拘ハラズ其銀行紙幣下付高ニ對シ年二分五厘(即チ半季一分二厘五毛)ニ當ル金額ヲ引去リ之ヲ日本銀行ニ預ケテ紙幣消却ノ元資ニ充ツヘシ○一 日本銀行ハ前二項ニ掲ケル金額ヲ預リ各國立銀行ト別段ノ約定ヲ結ビ之ヲ發行紙幣ヲ消却シテ大藏省ニ上納スルモノトス但其約定書ハ大藏卿ニ呈シテ之ヲ與書証印ヲ受クヘシ○一 日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ上納シタル時ハ大藏省ニ於テ此條例第五十一條ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其都度之ヲ公告スヘシ○一 日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ大藏省ニ上納シタルトキハ豫テ出納局ニ差出シ置キタル紙幣抵當公債証書ノ内右消却高ニ相當スル員額ヲ大藏省ヨリ直チニ其銀行ニ還付スヘシ

第十章第十七章ト改ム
第十三 銀行並酒造醫藥之部

第一百十二條 第一百十三條ト改ム
右奉 勅旨布告候事

酒造 醬麴 之 部

(九十)酒
造稅則

明治十三年九月二十七日御布告第四十号
今般酒造稅則別冊ノ通相定メ本年十月一日ヨリ施行シ從前ノ酒類稅則ハ同日ヨリ廢止候
條此旨布告候事

別冊

酒造稅則

第一章 免許鑑札 稅率

第一條 凡ソ酒類ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出酒造場一箇所毎ニ免許鑑札ヲ受ケヘシ○第二條 酒類ヲ分テ左ノ三類トシ免許ヲ受ケタル者ハ總テ之ヲ製造スルヲ得ヘシ○一類 釀造酒ノ清酒濁酒其他釀シタルモノヲ云フ○二類 蒸溜酒 燒酎其他蒸溜シタルモノヲ云フ○三類 再製酒 銘酒味淋白酒等釀造蒸溜ノ酒類ヲ調和シ又ハ之ヲ元トシテ製造シタルモノヲ云フ○第三條 免許ヲ受ケタル者ハ免許稅及ヒ造石稅ヲ納ムヘシ其額左ノ如シ○酒造免稅稅○酒造場一ヶ所ニ付 金三十圓○酒類造石稅○一類一石ニ付 金貳圓○二類一石ニ付 金三圓○三類一石ニ付 金四圓○第四條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス○第五條 免許ヲ請フ者ハ毎年九月三十日迄ニ管轄廳ニ願出ヘシ右期日ヲ過クレハ免許セサル者トス○第六條 免許鑑札賣買讓與スル時ハ双方連印ノ願書ヲ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ○第七條 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシキハ其旨管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第二章 納稅 造石檢査

第八條 免許稅ハ鑑札申受ケタル時之ヲ納ムヘシ○第九條 造石稅ハ左ノ三期ニ納ムヘシ

第一期 四月三十日限 十月一日ヨリ三月三十一日迄檢査濟石數ニ係ル稅額ノ半數

第二期 七月三十一日限 四月一日ヨリ六月三十日迄檢査濟石數ニ係ル稅額ノ半數○

第三期 九月三十日限 七月一日ヨリ皆造檢査濟石數ニ係ル稅額並前納額ノ殘數○第十

條 造酒ノ石數ハ總テ管廳ニ申出檢査ヲ受ケヘシ○第十一條 前條ノ酒類ハ八月三十一

日迄ニ皆造スヘシ○第十二條 自家用料又ハ造酒保存ノ料ニ充テ製造スル酒類ト雖也總

テ管廳ノ檢査ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ○第十三條 檢査未濟ノ酒類ニ檢査濟ノ酒類又

ハ古酒買入酒等ヲ混和スル者モ其造石稅ハ總テ石數ヲ以テ之ヲ納ムヘシ○第十四條 檢

査未濟ノ酒類ヲ届出ノ上他ノ酒類ニ變製(第一章第二條中一類ノ酒ヲ二類ニ二類ヲ三類

ニ變製スル類)スル時ハ造石稅ハ其變製シタル酒類ニ付之ヲ納ムヘシ○第十五條 檢査

濟ノ酒類ヲ他ノ酒類ニ變製スル時ハ既ニ檢査濟ノ石數ニ係ル造石稅ヲ納メ更ニ變製ノ石

數ニ就テ造石稅ヲ納ムヘシ但シ變製ノ節ハ必ス管廳ニ届出テ檢査ヲ受ケヘシ且製成ノ上

ニ第十條ノ手續ニ據リ檢査ヲ受ケヘシ○第十六條 皆造期限前ニ於テ非常ノ損害ニ罹リ

タル酒類ハ直ニ管廳ニ申出檢査ヲ受ケヘシ○第十七條 前條檢査ノ上再ヒ酒類ニ製成ス

ル者ハ其石數ニ應シ造石稅ヲ納ムヘシ其製成スルヲ得サル者及ヒ廢棄シタル者ハ其石數

ニ係ル造石稅ヲ免除ス○第十八條 葡萄酒及ヒ麥酒ノ類ヲ製造スル者ハ免許稅ヲ納ムヘ

シト雖也造石稅ハ之ヲ免除ス○第十九條 酒造中ハ管廳主任官員時々巡回スヘキニ付何

酒類ヲ問ハス其仕込タル酒も其他仕込米及ヒ營業ニ關スル諸帳簿等ノ檢査ヲ受ケヘシ

○第二十條 酒桶瓶類ハ新製修繕ヲ問ハス使用以前管廳ニ申出其容量ノ檢査ヲ受ケヘシ

但賣買等ハ其時々管廳ニ届出ヘシ

第三章 禁令 雜令

第二十一條 酢及ヒ酒もヒ販賣スルヲ許サス○第二十二條 都テ他ノ依托ヲ受ケ酒類

ヲ代造スルヲ許サス○第二十三條 檢査未濟ノ酒ヲ販賣シ又ハ自家ノ所用ニ消費スルヲ

第十三 酒造醬麴之部

八十九

許サス○第二十四條 免許鑑札ハ貸借スルヲ許サス○第二十五條 酒類(搾リ蒸溜)器械ニハ管應主任官員ノ封緘ヲ受ケ置キ使用スルキハ其旨申出開封ヲ請フヘシ但過誤等ニテ封緘ヲ毀損シタルトキハ直チニ管應へ届出再封ヲ請フヘシ○第二十六條 免許ヲ受ケタル者ハ其節管應へ該一期造酒見込ノ種目石數并ニ其造リ方法共届出ヘシ但種目變換並見込石數ノ増減等ハ其時々届出ヘシ○第二十七條 酒造ニ属スル倉庫納屋並ニ諸器械共豫テ管應へ届出ヘシ但シ増減ハ其時々届出ヘシ○第二十八條 一期造酒届出ノ石數何酒何石造ト書シタル標札ニ免許鑑札ノ番号ヲ書載シ之ヲ戸外ニ掲出ス可シ

第四章 罰令

第二十九條 免許鑑札ヲ受ケスシテ製造シタル者ハ其酒類及ヒ製造諸器械トモ没収シ免許税額ニ倍ノ金額ヲ科シ之ヲ賣捌キタル者ハ其石數ニ相當セル造石税三倍ノ金額ヲ併セ科スヘシ但シ本文酒類並ニ諸器械ヲ已ニ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徴スヘシ○第三十條 免許鑑札ヲ借受ケ製造スル者ハ第二十九條ニ據テ處分シ之ヲ貸與ヘタル者ハ其鑑札取上ケ免許税相當ノ金額ヲ科スヘシ○第三十一條 造酒石數ノ検査ヲ受ケスシテ賣捌キタル時ハ其代價ヲ追徴シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石税三倍ノ金額ヲ科スヘシ○第三十二條 検査ノ際酒類ヲ隠蔽シタル者ハ其酒類ヲ沒收シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石税三倍ノ金額ヲ科スヘシ但シ未製成ノ酒類(もともしろみノ類)ト雖モ隠蔽シタル者ハ本條ニ據テ處分ス○第三十三條 検査未済ノ酒類ヲ自用ニ消費シタル者ハ其石數ニ係ル造石税ニ相當スル金額ノ三倍ヲ科スヘシ○第三十四條 前條々ニ明記スルモノ、外第三章中ノ正條ニ違犯スル者ハ一圓ヨリ少ナカラス三拾圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

附則

酒造營業者ニアラスシテ自家飲料ノタメ酒類ヲ製造スル者ハ一ケ年一石(各種製造スルトキハ其總數ヲ合算ス)ニ超ヘカラス若シ一石ヲ超ルトキハ總テ本則ニ從フヘシ

(九十一) 酒造税 更正

明治十五年三月廿三日御布告第十七号

明治十三年(九月)第四十号布告酒造税則中左ノ通加除更正ス

第二條ノ内 第二類蒸溜酒ノ割註「燒酎」ノ下ニ「酒精出溜酒精」ノ六字ヲ加入ス○第五條

刪除○第九條ノ内○第一期第二期更正 第一期 四月三十日限 十月一日ヨリ二月中

検査済石數ニ係ル税額ノ半數○第二期 七月三十一日限 三月一日ヨリ六月中検査済石

數ニ係ル税額ノ半數○第二十一條 但書增加 但事故アリテ酒もとノ不用ニ属シタルモ

ノヲ同業ノ者ニ限り賣渡スハ此限ニアラス○第三十二條 但書刪除 右奉 勅旨布告候事

明治十五年十二月二十七日御布告第六十一号

明治十三年(九月)第四十号布告酒造税則左ノ通更正追加ス但第三條改正ハ明治十六年十

月一日ヨリ施行ス

(九十二) 酒造税 追加

第三條 免許ヲ受ケタル者ハ免許税及造石税ヲ納ムヘシ其額左ノ如シ○酒造免許税 酒

造場一箇所ニ付 金三拾圓○酒類造石税○一類一石ニ付 金四圓○二類一石ニ付 金五

圓○三類一石ニ付 金六圓○第四條二項三項 酒類製造新規願ノ者ハ造石高左ノ制限以

上ニアラサレハ免許セス○清酒 百石○濁酒 十石○一類 清酒濁酒 二類三類 五石○新

ニ酒造營業ヲナサントスル者ハ其地方同業者五人以上ノ連印ヲ以テ願出ヘシ○第五條

酒造營業人不在父ハ事故アル時ハ代人ヲ置キ此規則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシ○

第十條二項 廢業ノ際未製成ノ酒ヲ所持スル者ハ其節管應へ申出検査ヲ受ケ現石數ニ付

納税スヘシ但未製成ノ酒類ヲ營業者ニ賣渡シ又ハ二箇所以上免許ノ者其一箇所以上ノ廢

シ尙存セサル酒造場へ其酒類ヲ移ス時ハ管應へ届出且成製ノ上検査ヲ受クヘシ○第二十

二條 他ノ依托ヲ受ケテ酒類ヲ代造又ハ酒造營業人ニ非ラサル者ニ酢及ヒ酒類ヲ製造ス

ル爲メ酒造場ヲ貸スヲ許サス○第二十三條 検査未済ノ酒ヲ賣捌キ貸與讓與若クハ自家

ノ所用ニ消費スルヲ許サス検査既済ノ酒類へ検査未済ノ酒類ヲ混和スルヲ許サス○第三

第十三 酒造稽査之部

九十一

十一條 酒類石數ノ検査ヲ受ケヌシテ之ヲ賣捌キ又ハ貸與讓與シタル者ハ其代價ヲ追徴シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石税三倍ノ金額ヲ科スヘシ但第二十一條但書ノ場合ニ於テハ此限ニアラス○第三十二條 酒類ヲ隠蔽シタル者ハ其酒類ヲ沒收シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石税三倍ノ金額ヲ科スヘシ○第三十四條 第十四條又ハ第二十條ノ届出ヲ怠リタル者第五條第七條第二十八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス○第三十五條 第六條第二十五條第二十六條第二十七條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス第二十條第三十六條 第十條第二項第二十一條第二十二條第二十三條第二項ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ其製造酒類ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ但第二十三條第二項ノ酒類ハ總石數ヲ沒收ス○第三十七條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不罰罪及ヒ減輕再犯加重數罪併發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニアラス○第三十八條 酒造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰ス

酒造税則附則 飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シテ製造スル者ハ管廳ニ届出製造免第一條 自家用料ノ酒類(飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シ)ヲ製造スル者ハ管廳ニ届出製造免許鑑札ヲ受ケ鑑札料金八拾錢ヲ納ムヘシ○第二條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月卅日迄ヲ以テ一期トス○第三條 自家用料ノ酒類ハ一家内ニ於テ一期製造高一石(二種以スル者ハ其總)ヲ超ユルヲ得ス若シ之ヲ超ユル時ハ總テ本則ニ從フヘシ○第四條 自家用料ノ酒類ハ其住居セル一家ノ外ニ於テ之ヲ製造スルヲ得ス○第五條 自家用料ノ爲メ製造シタル酒類ハ之ヲ賣捌クヲ得ス○第六條 自家用料ノ酒類ヲ製造スル者免許許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシ時ハ管廳ニ申出再渡又ハ再替ヲ請フヘシ○第七條 自家用料ノ酒類ヲ製造スル者ハ主任官隨時之ヲ検査スヘシ○第八條 第一條第三條第

四條第五條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ○第九條 此規則ヲ犯シタル者ニハ本則第二十七條及ヒ第三十八條ヲ適用ス 右奉 勅旨布告候事

(九十三) 酒造税則改正

明治十三年(九月)第四十号布告酒造税則中左ノ通改正ス
第二十條 酒造用諸器械ハ使用以前管廳ニ申出検査ヲ受ケ其賣買讓與貸借ハ其時々管廳ニ届出ツヘシ○造酒着手後造石税完納以前ニ於テハ管廳ノ許可ヲ得スシテ諸器械ヲ酒造場外ニ移スヲ許サス○酒造用諸器械ヲ賣與讓與貸與及所持主ニ返却スル時ハ第九條ノ納期ニ拘ハラズ檢査済ニ係ル造石税ヲ完納スヘシ○第三十四條 「又ハ第二十條」ノ六字ヲ削除ス○第三十五條第二項 第二十二條第一項ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其器械ヲ沒收ス第二項ヲ犯シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ所シ尙ホ其器械ヲ沒收ス 右奉 勅旨布告候事

(九十四) 酒造税分徴収處

明治十六年八月四日御布告第二十五号
酒造用諸器械ハ自他ノ所有ヲ問ハズ現在品ノ一部又ハ全部ヲ賣シテ徴収ス 右奉 勅旨布告候事

(九十五) 酒類其他犯則

明治十六年十二月二十日御布告第四十三号
酒類稅則營業稅則藥印紙稅田烟草稅則ニ關シ租稅官吏ニ於テ犯則アリト認知シ若クハ思料スルトキハ其場所ニ立入り犯則ノ證據取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但其官吏ハ主任タルノ證據ヲ携帶スヘシ 右奉 勅旨布告候事

(九十六) 續取調手

明治十六年十二月十八日御布告第四十二号
第十三 酒造營業之部 九十三

釀造營業者モ酒造稅則ニ準據ス

釀造營業者釀元ニ供スル爲メ酒類ヲ製造スル者ハ酒造稅則中第三條免許稅第四條第二項第二項ヲ除クノ外該稅則ニ準據ス可シ
第一項ニ從ヒ酒類ヲ製造スル者酒類ヲ販賣シ又ハ檢査未済ノ酒類ヲ以テ釀ヲ製造スル者許サズ犯ス者ハ三圓以上二拾圓以下ノ罰金ニ處シ現在ノ酒類及ヒ釀ヲ沒収ス其已ニ賣捌キタル者ハ代價ヲ追徴ス○第一項ニ從ヒ酒類ヲ製造スル者釀製成ノ上ハ管廳ニ届出ヘシ違フ者ハ一圓以上一圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス 右奉 勅旨布告候事

(九十七)

釀造營業稅則

明治十三年九月廿七日御布告第四十一号
釀造營業稅則別冊ノ通相定本年十月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

釀造營業稅則

第一章 免許鑑札 營業稅

第一條 凡ソ釀造 釀造酒類ノもど)ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許鑑札ヲ受ケ一期營業稅トシテ左ノ通納ムヘシ○釀造營業稅 金五拾圓○第二條 營業免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス○第三條 一期中何月ニ新規免許ヲ受ケルモ營業稅ハ直ニ管廳ニ納ムヘシ○第四條 免許ヲ受ケタル者ハ其一期ノ販賣日込ノ石數毎年十月中管廳ニ届出ヘシ○第五條 販賣ノ節ハ其石數並ニ購求者居所姓名及ヒ年月日等遺漏ナシ帳簿ニ記載シ置キ翌年十月中管廳ニ差出シ檢査ヲ受ケヘシ(第二項) 釀造及ヒ仕込米諸帳簿倉庫納屋等主任官隨時之ヲ檢査スヘシ(第二項) 明治十五年十二月廿七日(第一項) 第六條 免許鑑札賣買讓與スル時ハ双方連印(十二号御布告ヲ以テ追加セラレタリ) 第七條 免許鑑札失却毀損スルカ或ハ代替改名ノ願書ヲ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ○第八條 免許ヲ受ケタル者ハ釀造賣買轉居セシ時ハ管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ○第九條 免許ヲ受ケタル者ハ釀造賣買捌所ト書シタル標札ニ免許鑑札ノ番号ヲ記載シ戶外ニ掲出スヘシ

第二章 禁令 罰令

第九條 免許鑑札ハ貸借スルヲ許サズ○第十條 免許鑑札ヲ受ケス釀造營業スル者ハ科料トシテ其營業稅ニ倍ノ金額ヲ徵スヘシ○第十一條 前明條ノ外販賣ノ節ニ數並ニ購求人ノ居所姓名等ノ帳記ヲ怠ルカ其他本則ニ違犯スル者ハ科料トシテ一圓ヨリ少ナカラズ五拾圓ヨリ多カラサル金額ヲ徵スヘシ○第十二條 釀造營業場ノ中ニ於テハ酒類受賣釀造受賣釀造營業ヲ爲シ又ハ酒類(釀造)ヲ製造スルヲ許サズ○第十三條 第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒収ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ○第十四條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニアラズ○第十五條 釀造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰ス 右奉 勅旨布告候事(第十二條以下ハ明治十五年十二月(第六十二号御布告ヲ以テ追加ス)

米商會所之部

(九十八)

米商會所條例

明治九年八月一日御布告第百五号

從來各地方ニ於テ差許置候米油限月賣買一切差止メ自今米穀賣買相場取引致度モハ會社規則取調可願出旨明治七年(十二月)第百三十八号ヲ以テ布告候處今般更ニ米商會所條例別冊ノ通相定候條營業致度者ハ右ニ照準可願出此旨布告候事

米商會所條例

第一條 緒言

第一節 米商會所ハ米穀流通ノタメ米商人ノ集會シテ賣買取引ヲ爲ス所ナリ而シテ協同結社之ヲ創立セント欲スル者ハ内務卿ノ免許ヲ請フヘシ○第二節 内務卿ハ地方ノ景狀第十三 米商會所之部 九十五

ヲ察シ之ヲ創立スルノ緊要ナルヤヲ考定シ之ヲ許可スルト否トノ權ヲ有ス○第二節 米商會所營業ハ五ヶ年ヲ以テ一期ト定ム右滿期ノ際猶之ヲ保續セント望ムモノハ更ニ其趣ヲ中立内務卿ノ免許ヲ乞フヘシ

第二條 會所創立ノ手續

第一節 米商會所ヲ創立スルニハ發起人十人以上ニシテ資本金ノ總額三万円以上タルヘシ○第二節 資本金ハ百圓ヲ以テ一株ト定メ發起人總員ニテ必ス資本金總高ノ半額以上ニ當ル株數ヲ所持ス可シ○第三節 會所ノ發起人ハ創立願書ニ此會所ヲ創立セントスル地方ノ從來米穀聚散ノ實況及ヒ將來賣買ノ目的ヲ詳悉シ各記名調印シ區戶長ノ與書ヲ得會所創立證書及ヒ定款申合規則等ヲ添ヘ之ヲ地方官廳ヘ差出スヘシ但創立證書中株主ノ責任ニ於テ有限或ハ無限ナルコトヲ明記スヘシ（本條但書ハ明治十二年二月）○第四節 地方官廳ニ於テハ願人共ノ身元行狀ヲ檢知シ且其目的ノ利害障礙ノ有無ヲ識別シ又會議所等ノ設ケアル地方ニ於テハ其集議ヲ取り併セテ之ヲ參酌シ相當ト思料スルトキハ意見書ヲ添ヘ内務卿ニ具申スヘシ

第三條 開業ノ手續

第一節 發起人等ニ於テ會所創立ノ許可ヲ受ケタルキハ直ニ其旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告シテ他ノ株主ヲ募ルコトヲ得○第二節 發起人ハ其募ニ應シタル株主等ト共ニ集會ヲ爲シ第五條ノ程限ニ從ヒ五人以上ノ肝煎及ヒ正副頭取ヲ撰任シ其住所姓名年齢等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方官廳ヲ經由シ大藏卿ノ認許ヲ受クヘシ大藏卿ハ時トシテ其改撰ヲ命スルコトアルヘシ（本節ハ明治十三年四月第十）○第三節 此頭取肝煎等ハ資本金總額ノ三分二ニ當ル現金或ハ日本政府ノ公債證書（此公債證書ハ時々相場ノ昂低ヲ以テ増減スヘシト雖モ明治七年、藏省乙第二十八号達ノ價額ヨリ減少スヘカラス）ヲ其地方官廳或ハ國立銀行ニ預ケ公正ナル預リ證書ヲ乞受ケ其寫ヲ内務卿ニ差出シ開業免

狀ヲ請求スヘシ○第四節 會所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告シ始メテ之ニ從事スルコトヲ得

第四條 社印ノ用方并印鑑差出方等ノ手續

第一節 開業免狀ヲ得テ其商業ヲ創メントスルニ當リ會所ノ印ヲ刻シ頭取以下諸役員ノ印ト共ニ其印影ヲ一纏メニシテ内務卿ニ差出スヘシ若シ改刻スルモノアルキハ其都度之ヲ差出スヘシ○第二節 會所ノ諸願届ムハ諸證書約定書及ヒ往復ノ文書等ニ至ルマテ會所一般ニ關スルコトハ其會所ノ名義ヲ用非會所ノ印ヲ捺シ頭取肝煎等之ニ署名加印スヘシ

第五條 役員ノ程限

第一節 會所ノ役員ト稱スル者左ノ如シ○頭取○副頭取○肝煎○以下支配人書記等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ會所ノ都合ニ任ス○第二節 會所ノ役員タル者ハ該會所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人トナルコトヲ許ルサス○第三節 右役員ハ株主ノ定例總集會ノ節投票ヲ以テ十株以上ヲ所持シタル株主中ヨリ肝煎ヲ撰舉シ肝煎ハ其同僚中ヨリ正副頭取ヲ推撰シ共ニ其住所姓名年齢等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方官廳ヲ經由シ大藏卿ノ認許ヲ受テ新舊交代シシムヘシ大藏卿ハ時トシテ其改撰ヲ命スルコトアルヘシ（本節ハ第三條第二節ト同斷改正セラレ）

第六條 役員ノ職務

第一節 頭取ハ會所ノ事務ヲ總轄シ他ノ役員ヲ指揮シ會所一切ノ責ニ任ス○第二節 頭取ハ肝煎分掌ノ事務ヲ定ムヘシ○第三節 副頭取ハ頭取ヲ助ケテ其事務ヲ共成シ時トシテハ其代理ノ任ニ當ルヘシ○第四節 肝煎ハ支配人書記等ノ役名ヲ議定シ其者等分掌ノ課程及ヒ俸給ヲ定メ社中差鎚ノ事ヲ判決シ金穀ノ出納ヲ管理シ株主ノ衆議ヲ取ラントスル專柄アル時ハ之ヲ招集スルコトアルヘシ○第五節 肝煎ハ毎月何回ト定メタル會議ノ議

第十三 米商會所之部

員トナルヘシ○第六節 肝煎ハ其同僚中又ハ頭取ニ於テ職任ニ不適當ノ行ヒアルカ又ハ之ヲ怠ル者アルトキハ臨時委員ヲ定メ次ノ肝煎會議ノ日ニ無名投票ヲ以テ三分二以上ノ

説ニ從ヒ之ヲ退職セシムルコトヲ得

第七節 株主ノ權利制限及株式譲渡ノ手續
第一節 株主ハ會所ノ本主ニシテ會所資本ノ一部ヲ入金シ其入金高ニ應シタル株券ヲ所持シ以テ株數相當ノ權利ヲ有シ營業上ノ損益ヲ負擔スル者ナルカ故ニ時々ノ景況ニ着目シ金員及ヒ出納勘定帳簿ヲ檢閲セント求ムルノ權アリ○第二節 株主ハ肝煎ノ承認ヲ得

テ仲買人ト爲ルヲ得其場合ニ於テハ別段證人ヲ要セスト雖モ通常仲買人タルノ條件ニ適應スルヲ要ス(本節モ第三條第ニ節ト同斷改正)○第三節 株主ハ何等ノ事故アルトモ會所解散ノ期ニ至ラサル時間ハ其株金ヲ取戻スヲ得ス○第四節 株主ハ肝煎ノ承認ヲ受ケタル上ニテ其所持ノ株式ヲ賣渡シ讓渡シ又ハ質入抵當ト爲スヲ得ヘシ但シ其質入抵當ト爲シタル時間ハ總會議事ノ時發言ノ權ナシ又役員ノ撰舉ニ應スルヲ許サス○第五節 株主其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓與ヲ爲シ時ハ其賣買授受双方ヨリ連印ノ證書ヲ會所ニ差出スヘシ會所ハ此證書ヲ受取タル時ニ株主帳ノ姓名ヲ書改ムヘシ若シ右手續ヲナサル間ハ證書賣買授受ノ効ナキ者トス

第八節 仲買人入社ノ手續
第一節 仲買人タルヲ得ヘキ者ハ丁年ニシテ會所所在ノ地ニ於テ滿一年以上米商營業ヲ爲シタル者ニ限ル而テ仲買人トナラント欲スル者ハ身元金千圓以上ヲ出シ株主二名以上ノ保證ヲ肝煎ニ申出テ其承認ヲ得タル上地方廳ヲ經由シテ仲買人トナラントスル願書ヲ大藏卿ニ捧ケテ其認許ヲ受クヘシ身元金ハ現金又ハ日本政府ノ公債證書ヲ以テ會所ニ預ケ置クヘシ(本節モ第三條第ニ節ト同斷改正)○第二節 仲買人タルモノハ他人ノ依頼ヲ受クルニアザサレハ賣買取引ヲ爲スヲ得ス其賣買取引ニ付會所ニ對シ自己ノ名義ヲ以テシ其賣買取引

上一切ノ責任ヲ負擔スヘシ但一口ノ取引ニ付賣買双方ノ依頼ヲ受クルヲ得ス(本節モ五年五月第二十六號)○第三節 仲買人ハ五名ヲ一組トシ組合中ヨリ一名ヲ推撰シ肝煎ノ承認ヲ得テ組頭トナシ組合中一切ノ取締ヲ爲サシムヘシ(本節モ第三條第ニ節ト同斷改正)○第四節 仲買人退社セントスルモ其旨趣ヲ書面ヲ以テ肝煎ニ申出ヘシ肝煎ハ之ヲ受ケテ十日間之ヲ會所ニ張出シ置キ會所ニ連帶シタル計算上ノ關係ナキヲ認メタル上ニテ其退社ヲ許シ身元金ヲ返付シテ証人ノ責任ヲ解クヘシ

第九條 商會所一般ノ規則(本條ハ明治十五年五月第二十一號御布告ヲ以テ改正ス)

第一節 外國人ヲ株主仲買人ト爲スコトヲ得ス○第二節 會所ニ於テ賣買取引ヲ爲スモノハ其會所ノ仲買人ニ限ルヘシ○第三節 會所ニ於テハ貸付金ヲナスヘカラス又仲買人ノ身元金及證據金ヲ使用スヘカラス○第四節 會所ハ此條例ニ基キ賣買主双方ノ約定ヲ履行セシムルノ責任アルモノトス○第五節 會所ハ左ノ場合ニ於テハ賣買ノ違約人トシテ會所限處分スルヲ得○第一 賣買主双方若シハ一方其會所ニ差入ルヘキ證據金ノ差入方ヲ怠リタルトキ○第二 賣買主双方若シハ一方其取引約定ノ期日ニ至リ其約定ヲ執行セサルトキ○第三 會所ニ於テ約定人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ會所ノ取引上於テ失ヒタルトキ○第六節 會所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ會所ノ取引上於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トヲ其者ノ證據金及ヒ身元金ヲ以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ尙其損失ヲ償フコト能ハサルトキハ會所ニ於テ其責ニ任スヘシ

第十條 賣買取引ノ手續(本條ハ明治十三年四月第十號御布告ヲ以テ改正ス)

第一節 會所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現米直取引ト定期トノ二様ニ分チ又其定期チ二種ト爲シ其一ヲ約定ノ期限ニ至リ現米金ノ受渡ヲ爲スモノトシ其二ヲ豫定ノ期限内ニ其取引ヲ完結シ又ハ解約スルモノトス○第二節 現米直取引ハ見本米ヲ以テ會所内ニ於テ賣買ヲ爲シ其現石受渡シノ順序ハ會所ノ規則ニ從フヘシ○第三節 定期賣買取引約定シタ

第十三 米商會所之部

ルトキハ會所ノ役員ニ届出テ賣買主双方ヨリ約定ノ証據金ヲ會所ニ差入ルヘシ此証據金ハ少ナクトモ約定代金高十分ノ二ヨリ下ルヘカラス又此証據金ノ外ニ時々相場ノ昂低ニ因テハ追証據金或ハ期日前ニ至リ尙ホ其約定ヲ確固ナラシムル爲メ増証據金ヲ差入シムヘシ○第四節 定期賣買約定ノ期限ハ三月ヨリ永カルヘカラス而シテ其期ニ至レハ會所ノ役員立會ノ上必ス現米金ノ受渡ヲ爲シ其取引ヲ完結スヘシ但約定濟ノ分ハ双方ノ都合ニ依リ其期限内ニ買戻シ又ハ買受ケタル分ヲ他人ヘ賣渡スヲ得

第十一條 手数料并ニ口銭ノ制限

第一節 會所ニ於テ賣買双方ヨリ領収スヘキ手数料直取引ハ賣買金高ノ二千分ノ一ヨリ多カラス又定期取引ハ千分ノ二ヨリ多カラス○第二節 仲買口銭ハ其額ハトノ示談ニ任スト雖モ其制限ハ前節手数料ノ高ニ超ユ可ラス

○第三節 手数料口銭ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得

第十二條 會議ノ規則

第一節 會所ノ會議ヲ分テ肝煎會議ト株主總集會トノ二類トス○第二節 肝煎會議ハ毎月何回ト定メ頭取ヲ以テ議長トナス此會議ニ於テ發言ノ權ハ一人ニ付一説ト定メ衆說ヲ取リテ其議事ノ可否ヲ決ス若シ可否ノ數相半ハスルキハ議長ノ判決ニ任カス○第三節 右會議ニ當リ出席定員ノ半ハニ充タサルキハ其議事ヲ始ムヘカラス但シ急遽ノ事件ハ格別ナリトス○第四節 株主ノ總集會ハ毎年一度又ハ數度例日ヲ定メテ之ヲ開ク此集會ハ頭取肝煎ノ撰舉及ヒ會所營業ノ實況計算ノ得失ヲ議スルヲ主務トス○第五節 株主五分ノ一以上ノ請求又ハ肝煎ノ衆議ニ依リテハ臨時總集會ヲ開クヲ得○第六節 總集會ニ於テノ發言ノ權利決議ノ方法ハ便宜ニ從テ之ヲ定ムヘシ○第七節 總集會ニ於テノ議長ハ頭取又ハ株主中ヨリ撰舉スルモ妨ケナシ

第十三條 資本金増減ノ手續

第一節 會所ニ於テ資本金高ヲ増減セントスルキハ總集會ノ決議案ヲ具シ頭取肝煎其次第ヲ詳記シ内務卿ノ指揮ヲ受クヘシ但資本金賣買取引ノ景況ニ對シ不適當ト認ムルキハ農商務卿ハ其適當ノ金額ニ増加スヘキヲ命スルヲアルヘシ

第十四條 損益金計算ノ定規

第一節 頭取肝煎ハ毎年年度以上營業ノ總決算ヲ爲シ其内税金並積立金其他一切ノ社費ヲ引去リ殘リ損益高ヲ以テ株數ニ割リ合セ之ヲ株主ヘ分賦スヘシ○第二節 右計算表ハ株主ニ分賦ノ日ヨリ十五日内内務卿ニ届出且世上ニ公告スヘシ

第十五條 納税ノ手續及ヒ積金ノ規則

第一節 會所ハ會所ニ於テ領収セシ賣買手数料總金高十分ノ四ヲ稅納スヘシ而シテ其税金前半年分ハ七月中後半年分ハ翌年一月中之ヲ地方廳ヘ上納スヘシ

第十六條 報告ノ定規

第一節 會所及ヒ仲買人ハ毎日取扱ノ事項并金數出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且其簿記ノ方法ニ於テハ農商務卿ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘシ○第二節 會所及ヒ仲買人ニ於テ使用スル所ノ諸帳簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ農商務卿ニ届出ヘシ○第三節 會所ハ賣買實際ノ景況及ヒ金數出納其他役員ノ進退并株主ノ異同仲買人ノ退社ヲ農商務卿ニ報告スヘシ

第十七條 官員検査規則

本條モ第十條ト同斷

第十三條 米商會所之部

第一節 地方長官ハ時々官員ヲ派出シ會所及仲買人營業ノ模様其他諸帳簿並現米ノ所在其受渡ノ實況及ヒ會所ノ現金等ヲ查覈セシムヘシ又時トシテハ農商務省ヨリ官員ヲ派出シ之ヲ檢査セシムルコトアルヘシ若シ檢査官員ヨリ疑問等アルトキハ會所ノ役員及仲買人等ハ逐一答辨ヲ爲サヘカラス

第十八條 諸願届其他ノ書類上達ノ定規(本條モ第十條六條ト同斷)

第一節 會所ヨリ農商務卿ニ差出スヘキ文書中諸願ハ一通其他ハ一通宛ニシテ其差出方ハ地方廳ヲ經由スヘシ

第十九條 罰則(本條第一第二節ハ明治十三年四月第十九号御布告ヲ以テ改正追加ス又三節ハ從前ノ二節又第四節ハ明治十五年第二十六号御布告ヲ以テ)

改 第一節 會所ノ役員及ヒ株主仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タル者株主仲買人條例ニ背犯シタルヲ不問ニ措キ又ハ背犯セシメタル實証アルキハ役員並本人共其輕重ニヨリ三拾圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス○第二節 前節ヲ犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ依テ科シタル罰金ノ半額ヲ給シ○第三節 官員檢査ノ節簿冊書類ヲ差出スコトヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辨ヲ爲サ、ル者アルキハ頭取又ハ其主任者ヘ五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ○第四節 會所ノ規約ニ背犯シタル役員株主仲買人ヲ會所限リ處分スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ルニ止ルモノトス但共過怠料ハ株金身元金ノ高ニ超ユルヲ得ス

(九十九)

米穀其
他金銀
貨幣ヲ
密賣買
ニ付御
布告

明治十三年四月十五日御布告第二十一号

法律規則ニ遵ヒ官許ヲ得タル米商會所株式及ヒ債權取引所外若シクハ内タリトモ竊ニ米穀並金銀貨幣及ヒ株式ノ限月若シハ現場(定規ヨリ現リケル現場ヲ指ス)賣買其他之ニ類似シタル取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若シクハ其賣買取引ヲ誘助シタル者拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ無効ト爲スヘシ但本條例ニ背犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ因テ科シタル罰金ノ全部ヲ給ス其自カラ犯シタル者事未ク發覺セサル前ニ於テ自首シタル時ハ其罪ヲ問ハズ右布告候事

(百)

改米
商所管
卿省
商會所
等不正
處分

明治十四年五月廿五日御布告第三十一号

明治九年(八月)第五百号布告米商會所條例中内務省及内務卿又ハ大藏卿トアルハ都テ農商務省及農商務卿ト改正候條此旨布告候事

(百一)

米商會所及ヒ株式取引所ノ賣買ニ不正惡弊アルカ又ハ賣買取引上ノ景況穩當ナラサル爲メ公共ニ妨害ヲ及ホスト認ムルキハ農商務卿ハ其會所又ハ仲買人ノ營業ノ一部又ハ全部ヲ停止若シハ禁止シ又ハ役員ヲ退任セシムルコトアルヘシ但本年第六号布告米商會所條例追加第六條ハ削除ス右奉 勅旨布告候事(本文中其會所ノ下ニ及ヒ取引所ノ五字ヲ脱スル旨同年八月内閣書記官ヨリ告知アリ)

明治十五年十二月二十七日御布告第六十五号

米商會所並株式取引所仲買人納稅規則左ノ通制定シ來十六年四月一日ヨリ施行ス

米商會所株式取引所仲買人納稅規則

第一條 米商會所仲買人定規賣買ヲ爲スルハ賣買双方ヨリ各約定代金高千分ノ五ヲ納稅スヘシ○第二條 株式取引所株式仲買人公債証書並諸株式ノ定期賣買ヲ爲スルハ賣買双方ヨリ各約定代金高千分ノ一ヲ納稅スヘシ○第三條 第一條第二條ノ場合ニ於テ定期内ニ轉賣又ハ買戻ヲ爲ス者ハ其轉賣又ハ買戻ニ係ル稅ヲ免除ス○第四條 株式取引所金銀貨仲買人金銀貨ノ取引ヲ爲スルハ賣買双方ヨリ各其取引代金高千分ノ二半ヲ納稅スヘシ但定期取引約定中轉賣又ハ買戻ニ係ルモノハ第三條ニ據ル(但書ハ明治十六年八月第一廿八号御布告ヲ以テ追加)○第五條 賣買ヲ解約スルコトアルモ其稅金ハ之ヲ還付セス○第六條 稅金ハ會所又ハ取引所ニ納ムヘシ○第七條 會所及ヒ取引所ハ仲買人ヨリ納メタル稅金ヲ每一箇月取總メ翌月十日限リ地方廳ニ上納スヘシ○第八條 稅金徵集ノ方法ハ大藏卿ノ達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ○第九條 大藏卿ハ地方廳ニ委任シ又ハ隨時官吏ヲ派出シ納稅ノ精算ヲ檢査セシ

第十三 米商會所之部

(百二)米
商會所
條例中
改正

ムヘシ〇第十條 税金ヲ納メヌシテ賣買取引スル者ハ脱税高三倍ノ罰金ニ處ス但此場合ニ於テハ仲買人タルノ認許ハ其効ヲ失フモノトス〇第十一條 前條ノ罰金ハ仲買人ノ身元金ニ對シテ第一先取ノ特權ヲ有スヘシ〇第十二條 會所及取引所ニ於テ本則納税ノ取締ヲ怠ルトキハ米商會所條例第十九條第一節株式取引所條例第四十八條及ヒ本年第四十六号布告ニ依リ所分シ仍ホ其資本金ヲ以テ納税ノ欠額ヲ追徴スヘシ右奉 勅旨布告候事

(百三)米
商會所
類似諸
物品賣
買處分

明治十五年十二月廿七日御布告第六十六号
明治九年(八月)第百五号布告米商會所條例第十條第三節中約定代金高十分ノ二トアルヲ十分ノ一ト改メ第十五條第一節中賣買手数料總金高十分ノ四トアルヲ十分ノ二ト改ム但來十六年四月一日ヨリ施行ス右奉 勅旨布告候事
明治十六年一月十五日御布告第四号
米商會所株式取引所ノ限月若クハ現場賣買ノ方法ニ倣ヒ又ハ之ニ類似ノ方法ヲ用ヒ諸物品ノ賣買取引ヲ爲シタル者及ヒ情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ總テ明治十三年(四月)第二十一号布告ニ據リ處分スヘシ右奉 勅旨布告候事

(百四)米
商會所
人竊ニ
賣買方
處分

明治十六年八月六日御布告第二十九号
米商會所及株式取引所ノ仲買人ニシテ竊ニ米穀並ニ金銀貨幣公債證書株式ノ限月若クハ現場(定期ヨリ起リタ)賣買又ハ其類似ノ取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ與給シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ五十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ米商會所條例及株式取引所條例ノ手續ヲ爲サシム右奉 勅旨布告候事

牛馬賣買之部

(百五)牛
馬賣買
規則

明治五年十一月四日御布告第三百三十号

諸省府縣

牛馬賣買渡世ノ者免許税ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相違候處今般別紙規則書ノ通相定候條各管内共區々ノ取計無之様可致候事

別紙

牛馬賣買渡世ノ者免許税ノ儀昨辛未十二月相違候處此度御詮議ノ次第モ有之別紙ノ通規則相定候條是迄相渡候免許鑑札ハ引換相渡シ引上候分ハ各府縣廳ニ於テ取纏メ燒捨其段可申立候其餘ハ規則ニ從ヒ處置可致事
壬申十月

大藏省

第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬壹鼻綱ニ付免許鑑札壹枚相渡可申事但壹鼻綱ハ牛馬共七匹ニ限鑑札壹枚ヲ所持スル者旅行ノ時ハ七匹以内ニ枚ヲ所持スル者ハ十四匹ニ限ルヘシ其餘準之可申事〇第二條 免許鑑札新規願受ケ候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納税シ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納税可致事(本條ハ明治七年四月第四)〇第三條 免許鑑札萬一燒失流失盜難等ニテ失ヒ候者有之其段申出候ハ事實取調鑑札相渡可申事〇第四條 免許鑑札壹枚ニ付一ヶ年税銀一圓上納可致事但右税金ハ毎年二月八月兩度ニ半額宛各管轄所ニ取立租稅察へ上納可致尤新規免許ノ者ハ其都度半額直ニ取立上納可致候事(但前ハ明治八年第百)〇第五條 免許鑑札燒印並押切判ハ雛形ノ通其管轄所ニ於テ製造致シ各稼人共へ相渡可申事但シ鑑札相渡次第稼人共國郡町村名及ヒ名面等詳細取調右鑑札印鑑相添當省へ可差出事〇第六條 右様取締相立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札ニテ密々賣買候者有之相顯ハルハ於テハ牛馬共取上ケ免許税十倍ノ科料可申付事但密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テ

第十三

牛馬賣買之部

ハ其訴主へ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二寢美トシテ被下候事○第七條 取上ケ牛馬拂代並科料金等ノ儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事○第八條 此規則施行候ニ付諸入費ハ一ケ年試驗ノ上可申立事○第九條 免許鑑札ハ貸借決シテ不相成候事但免許鑑札借受ケ買買スル者ハ規則第六條密買買ノ廉ニ照シ處分可致貸渡候者ハ免許稅五倍ノ科料可申付事(本條ハ明治七年十二月第百三十一號御布告ヲ以テ追加)

烟草之部

(百六)烟草 明治十五年十二月廿七日御布告第六十三號

明治八年(十月)第百五十號布告烟草稅則別紙ノ通改定シ來明治十六年七月一日ヨリ施行ス但明治十年(二月)第十四號布告第一項ハ廢止ス右奉 勅旨布告候事

烟草稅則

第一章 烟草營業

第一條 烟草營業者ヲ分テ左ノ三種トス○烟草製造人○烟草仲買人○烟草小賣人○第二條 刻烟草又ハ卷烟草等ヲ製造スル者ヲ烟草製造人トス但價銀ヲ受ケテ他ノ製造人ノ烟草ヲ製造スル者ハ此限ニアラス○第三條 未製造ノ烟草ヲ買入レ之ヲ製造人又ハ同業者へ賣渡シ及製造烟草ヲ買入レ之ヲ小賣人又ハ同業者へ賣渡ス者ヲ烟草仲買人トス○第四條 製造烟草ヲ自用者へ賣捌ク者ヲ烟草小賣人トス

第二章 營業鑑札

第五條 烟草營業者ハ管廳へ願出營業鑑札ヲ受クヘシ但製造仲買及小賣ヲ兼業スル者ハ各其營業鑑札ヲ受クヘシ○第六條 烟草營業者自己又ハ家族雇人ヲ以テ仕入又ハ出賣ヲ爲ストキハ管轄廳ニ願出仕入又ハ出賣鑑札ヲ受ケ各自之ヲ携帶ス可シ○第七條 烟草營

業者ハ鑑札ヲ受クルトキ左ノ通鑑札料ヲ納ム可シ○烟草營業鑑札料 壹枚ニ付金貳拾錢○烟草仕入札料 壹枚ニ付金拾錢○烟草出賣鑑札料 壹枚ニ付金拾錢○第八條 鑑札ヲ失毀損シ又ハ代替改名轉居セシキハ之ヲ管轄廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フ可シ但前條ノ通鑑札料ヲ納ム可シ○第九條 營業人廢業スルトキハ管轄廳へ届出鑑札ヲ還納スヘシ○第十條 鑑札ハ貸借賣買及讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第三章 營業稅

第十一條 烟草營業者ハ左ノ通營業稅ヲ納ム可シ但兼業スル者ハ各其營業稅ヲ納ム可シ○烟草製造營業稅 壹箇年命拾五圓○烟草仲買營業稅 壹箇年命拾五圓○烟草小賣營業稅 壹箇年命五圓○第十二條 烟草營業稅ハ年々兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限管轄廳ニ納ムヘシ但勅ニ開業スル者ハ營業鑑札ヲ受クル節其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

第四章 印稅

第十三條 烟草製造人刻烟草ヲ製造スルトキハ左ノ量目ニ從ヒ玉造紙包又ハ箱詰ニ裝置シ相當ノ印紙ヲ用ユヘシ

量目	印稅	同	同
百匁	四錢	同	同
五十匁	二錢	同	同
三十匁	一錢二厘	同	同
廿匁	八厘	同	同
十五匁	六厘	同	同
十匁	四厘	同	同
五匁	二厘	同	同
量目	印稅	同	同
百匁	四錢	同	同
五十匁	二錢	同	同
三十匁	一錢二厘	同	同
廿匁	八厘	同	同
十五匁	六厘	同	同
十匁	四厘	同	同
五匁	二厘	同	同

第十三 烟草之部

第十四條 刻烟草ヲ玉造ニ爲ストキハ帶印紙ヲ以テ結束シ其封緘ノ箇所及印紙ノ彩紋ハ
カケ製造人ノ印章ヲ以テ消印シ箱詰又ハ紙包ハ封緘ノ要部ニ印紙ヲ貼用シ製造人ノ印章
ヲ以テ之ニ消印ス可シ○第十五條 刻烟草ヲ五匁以下册シ賣ニ爲ストキハ二厘ノ帶印紙
ヲ以テ結束ス可シ○第十六條 刻烟草ヲ玉造又ハ册賣ニ爲ストキハ帶印紙ノ外他ノ印紙
ヲ以テ之ヲ結束スルコトヲ得ス○第十七條 外國へ輸出スル烟草ニ限リ輸出ノ節稅關
ニ於テ厘稅トシテ印稅相當ノ金額ヲ輸出人へ下付ス可シ○第十八條 烟草印紙ノ種類價
格左ノ如シ

帶印紙	淡青色	一枚	九厘	帶印紙	老綠色	一枚	二錢
帶印紙	淡青色	二厘		帶印紙	淡青色	同	三錢
帶印紙	淡青色	三厘		帶印紙	淡青色	同	四錢
帶印紙	淡青色	四厘		帶印紙	淡青色	同	六錢
帶印紙	淡青色	六厘		帶印紙	淡青色	同	八錢
帶印紙	淡青色	八厘		帶印紙	淡青色	同	一兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	二兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	三兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	四兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	五兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	六兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	七兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	八兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	九兩
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	一圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	二圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	三圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	四圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	五圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	六圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	七圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	八圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	九圓
帶印紙	淡青色	同		帶印紙	淡青色	同	十圓

第十九條 烟草印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買ス
ルコトヲ得ス○第二十條 印紙貼用ノ細則ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可シ
第二十一條 刻烟草ハ每個必ス製造人ノ氏名住所ヲ附記ス可シ○第二十二條 烟草營業
者ハ無印紙又ハ不足印紙ノ刻烟草ヲ所持スルコトヲ得ス仕入出賣ヲ爲ス者モ亦同シ○第
二十三條 烟草營業者ハ左ノ帳簿ヲ調製ス可シ其記載方ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可
シ○烟草製造人 烟草製造帳○烟草仲買人 烟草買入帳 烟草賣渡帳○烟草小賣人 烟
草買入帳○第二十四條 烟草營業者ハ管轄廳ニ願出印紙買入鑑札ヲ受ケ印紙買入ヲ爲ス
毎ニ其鑑札ヲ携帶シ印紙賣捌人ニ示ス可シ○第二十五條 印紙賣捌人ハ印紙買受人ノ鑑
札ヲ照査シテ其賣渡高及買受人ノ氏名住所賣渡ノ年月日ヲ帳簿ニ登記ス可シ○第二十六

條 烟草營業者ハ烟草印紙ノ買受高其買入場所及使用高ヲ帳簿ニ登記スヘシ○第二十七
條 烟草營業者ハ前年七月一日ヨリ其年六月三十一日迄ノ烟草買入高賣捌高製造高並印
紙買入高及六月三十日ノ烟草并印紙ノ現在高ヲ取調七月三十一日限管轄廳へ届出ツヘシ
○第二十八條 印紙賣捌人ハ前年七月一日ヨリ其年六月三十日迄ノ印紙賣捌高及買入人
ノ氏名住所ヲ取調七月三十一日限管轄廳ニ届出ツヘシ○第二十九條 烟草營業者ハ營業
ノ標札ヲ戶外ニ掲出スヘシ但シ書式ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可シ○第三十條 印紙
買入鑑札ハ貸借賣買及讓渡ヲ爲スコトヲ得ス○第三十一條 未製造ノ烟草ハ烟草營業者
ニアラサル者ニ賣渡スコトヲ得ス但貸與讓與ノ名義ヲ以テスルモ亦同シ

第六章 檢査

第三十二條 烟草營業者ノ帳簿及ヒ其所持ノ烟草ハ主任官隨時之ヲ檢査ス可シ○第二十
三條 檢査官吏ハ檢査ノ時官ノ印章ヲ携帶シ營業者ノ求ニ應シテ之ヲ示ス可シ

第七章 罰則

第三十四條 營業鑑札ヲ受ケテ烟草營業者ヲ爲ス者ハ營業稅通脫ニ係ル金高三倍ノ罰
金ニ處シ仍ホ現在ノ烟草ヲ沒收シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス○第三十五條 烟
草營業者ニシテ無印紙又ハ不足印紙ノ刻烟草ヲ所持シ又ハ賣渡シタル者ハ拾圓以上百圓
以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其賣渡代價ヲ追徵ス之ヲ貸與讓與シタル者モ亦同シ其罪ヲ論ス○
第三十六條 帳簿ノ登記ヲ詐テ脫稅ヲ謀リ若シハ脫稅ノ便ヲ與ヘタル者又ハ届書ニ詐偽
ノ記載ヲ爲シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス○第三十七條 烟草營業者ニシテ
無印紙又ハ不足印紙ノ刻烟草ヲ買受ケタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス之ヲ借
受讓受ケタル者モ同シ其罪ヲ論ス○第三十八條 第六條第十四條第十五條第二十一條第
二十四條ニ違犯シタル者及第二十三條ニ違犯シテ帳簿ノ調製ヲ怠ル者ハ五圓以上五拾圓
以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル烟草ハ之ヲ沒收シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス

第十三

烟草之部

○第三十九條 管轄廳ノ許可ヲ得スシテ印紙ヲ發賣スル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其印紙ヲ沒收ス之ヲ買受ケタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス○第四十條 未製造ノ烟草ヲ烟草營業者ニアラサル者ニ賣渡シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス○第四十一條 第十三條ノ烟草裝置區分ニ違フ者ハ貳圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル烟草ヲ沒收ス○第四十二條 鑑札ヲ賣買貸借又ハ讓受讓渡シタル者及第二十五條第二十六條ニ違ヒタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス○第四十三條 烟草自用者ニシテ未製造ノ烟草又ハ無印紙ノ烟草ヲ買受ケタル者ハ壹圓以上四拾圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス○第四十四條 第八條第九條第二十七條第二十八條ノ届出ヲ怠リタル者及第二十九條ニ違犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス○第四十五條 第二十三條第二十九條ニ依リ定メタル布達ニ違犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス○第四十六條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不
論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス○第四十七條 烟草營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此ノ規則ヲ犯シタルトキハ其營業者ヲ處罰ス

(百七) 烟

草稅則
中追加

明治十六年十二月十二日御布告第四十一号

明治十五年(十二月)第六十三号布告烟草稅則中左ノ通追加ス

第十三條 三十匁ノ次ハ 四十匁 一錢六厘 二錢四厘 三錢三厘○五十匁ノ次ハ 八十匁 三錢二厘 四錢八厘 六錢四厘○第十八條 同淡青色ノ次ハ 同淡黑色 同三錢二厘○同黃綠色ノ次ハ 同嬌栗色 同四錢八厘○同紫色ノ次ハ 同朱色 同六錢四厘
右奉 勅旨布告候事

爲替手形約束手形條例之部

(百八) 爲 明治十五年十二月十一日御布告第五十七号

替手形
約束手形
條例

爲替手形約束條例別冊ノ通制定ス右奉 勅旨布告候事

別冊

爲替手形約束手形條例

第一章

第一節 爲替手形ノ性質及ヒ法式

第一條 爲替手形ハ振出人ヨリ支拂人ニ當テ記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ拂渡サシムル証券ヲ謂フ○第二條 爲替手形ニハ左ノ件々ヲ記載シ振出人記名ヲ印ス可シ○一 金額○二 振出ノ年月日及ヒ場所○三 支拂ノ期限及ヒ場所○四 支拂人ノ氏名○五 受取人ノ氏名○六 受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ支拂フ可キ旨○第三條 爲替手形ハ一ノ爲替ニ付同文ノ手形ニ通又ハ三通ヲ振出スヲ得此場合ニ於テハ各通ニ番号ヲ附シ内一通ニ對シ支拂ヲ爲シタル時ハ他ノ各通ハ無効タル可キヲ記載ス可シ○第四條 爲替手形ノ金額ハ五圓以上ノ金額ニ限ル者トス

第二節 支拂期限

第五條 爲替手形ノ支拂期限ハ左ノ如ク區別ス○一 一覽拂○二 定期拂○三 一覽後定期拂○第六條 一覽拂ノ手形ハ其呈示ヲ受ケタル時直チニ支拂フヘキ者トス○第七條 定期拂ノ手形ハ手形ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス○第八條 一覽後定期拂ノ手形ハ一覽濟ノ日ヨリ其日數ヲ起算シ手形ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス○第九條 一覽拂ノ手形及ヒ一覽後定期拂ノ手形ハ振出ノ日附ヨリ三ヶ月以内ニ之ヲ呈示ス可シ○第十條 定期拂ノ期限ハ振出ノ日附ヨリ一覽後定期拂ノ期限ハ一覽濟ノ日ヨリ六ヶ月以内トス

第三節 爲替資金

第十一條 振出人ハ支拂人ニ對シ爲替資金ヲ交付スルノ義務アル者トス○第十二條 振
第十三 爲換手形約束手形條例之部 百十一

出人ヨリ支拂人ニ對シ貸方計算アル時ハ之ヲ以テ爲替資金ニ供用スルコトヲ得

第四節 裏書

第十三條 爲替手形ハ裏書ヲ以テ其所有權ヲ移轉スルコトヲ得○第十四條 裏書ニハ買受人又ハ讓受人ノ氏名及年月日ヲ記載シ賣渡人又ハ讓渡人氏名住所ヲ記シ調印ス可シ○第十五條 裏書人ハ振出人及ヒ自己以前ノ裏書人ト共ニ自己以後ノ裏書人及ヒ手形所持人ニ對シ相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス○第十六條 手形ノ裏面ニ餘白ナキ時ハ補綴ヲ爲シ裏書ヲ爲スコトヲ得

第五節 保證

第十七條 振出人裏書人及ヒ支拂人ハ他人ヲシテ手形ノ支拂ヲ保證セシムルコトヲ得保証人ハ其保證ノ旨ヲ手形又ハ別紙ニ記載ス可シ○第十八條 振出人裏書人ノ保証人ハ本人義務ヲ欠タル場合ニ於テ本人ニ代リ他ノ義務者ト相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス○第十九條 保證ハ支拂ヲ爲シタル時ハ本人ニ代リ其權利ヲ有スル者トス

第六節 引受

第二十條 定期拂手形及ヒ一覽後定期拂手形ノ所持人ハ支拂人ニ其引受ヲ求ムルコトヲ得○第二十一條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ其旨及ヒ年月日ヲ手形ニ記載シ記名調印ス可シ○第二十二條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ振出人身代限ノ處分ヲ受ケタル場合ト雖モ其取消ヲ爲スコトヲ得ス○第二十三條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ所持人ハ引受ノ拒ミ證書ヲ受ケ可シ○第二十四條 所持人拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ振出人又ハ裏書人ニ通知シテ爲替金額及ヒ諸費用ニ相當スル抵當又ハ保證人ヲ以テ保證ヲ立シムルコトヲ得通知ヲ受ケタル裏書人ハ振出人又ハ自己以前ノ裏書人ニ對シ所持人同一ノ處置ヲ爲スコトヲ得○第二十五條 振出人又ハ裏書人ノ内既ニ相當ノ保證ヲ立タル者アル時ハ其以後ノ裏書人ハ保證ヲ

立ルノ義務ヲ免ル、者トス

第七節 支拂

第二十六條 手形ニ貨幣ノ種類ヲ記シタル時ハ其貨幣ヲ以テ支拂フ可シ○第二十七條 手形所持人ハ支拂期限ニ於テ其支拂ヲ請求ス可シ若シ定式ノ祝日祭日或ハ慣習ノ休業日ニ當ル時ハ其翌日之ヲ請求ス可シ○第二十八條 手形所持人支拂金ヲ受取ル時ハ手形ニ領収ノ旨ヲ記載シ記名調印シテ金額ト引換ヘ支拂人ニ交付ス可シ○第二十九條 一ノ爲替ニ付キ手形數通アル時ハ支拂ハ其引受ケテ記載シタル手形ニ對シ支拂ヲ爲ス可シ○第三十條 支拂人期限ニ至リ手形ノ支拂ヲ爲サハル時ハ手形所持人ハ支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケ可シ○第三十一條 支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル者ハ其旨ヲ電信書留郵便其他證據ト爲ル可キ手續ヲ以テ振出人及ヒ各裏書人ニ通知ス可シ

第八節 拒ミ證書

第三十二條 支拂人手形ノ引受又ハ支拂ヲ拒ム時ハ手形ニ附箋ヲ爲シ其旨及ヒ年月日ヲ記載シ記名調印シ可シ之ヲ拒ミ證書ト爲ス○第三十三條 支拂ハ拒ミ證書ヲ作ルコトヲ肯セス又ハ其住所分明ナラス又ハ不在ニテ代理人ナキ時ハ所持人自ラ其始末ヲ記シ記名調印シテ郡區役所若クハ戶長役場ノ證印ヲ受ケ拒ミ證書ニ代用ス可シ○第三十四條 支拂人身代限ノ處分ヲ受ケタル場合ニ於テハ支拂期限前ト雖モ手形所持人ハ拒ミ證書ヲ受ケルコトヲ得

第九節 償還ノ要求

第三十五條 手形所持人支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其日附ヨリ十五日以内ニ振出人裏書人ノ中一人若クハ數人ニ對シ爲替手形ノ金額期限後ノ利子及ヒ拒ミ證書並ニ通知ノ費用ノ償還ヲ要求スルコトヲ得○第三十六條 第三十五條ノ要求ニ對シ償還ヲ爲シタル裏書人ハ其日ヨリ十五日以内ニ自己以前ノ裏書人又ハ振出人ノ内一人若クハ數人ニ對シ自己爲換手形約束手形條例之部

ノ償還シタル金額及ヒ其利子ヲ要求スルコトヲ得○第三十七條 振出人ハ爲替資金ヲ支拂人ニ交付シタルノ故ヲ以テ償還ノ要求ヲ拒ムコトヲ得ス○第三十八條 要求ヲ受ケタル者ハ拒ミ證書ヲ附シタル爲替手形及ヒ證據ヲ添ヘタル計算書ト引換ヘコト非レハ償還ヲ爲スニ及ハス○第三十九條 第九條ノ呈示期限第二十七條ノ支拂請求期限及ヒ第三十五條第三十六條ノ要求期限ヲ怠リタル者ハ裏書人及ヒ爲替資金ヲ交付シタル振出人ニ對シ要求ノ權利ヲ失フ者トス但引受ヲ爲シ若シハ爲替資金ヲ受ケタル支拂人又ハ資金ヲ交付セサル振出人ニ對シ第九條第二十七條ノ期限ニ係ル者ハ振出ノ日附ヨリ起算シ第三十五條第三十六條ノ期限ニ係ル者ハ拒ミ證書ノ日附ヨリ起算シテ三ヶ年間償還ヲ要求スルコトヲ得

第十節 紛失

第四十條 手形所持人ノ手形ヲ紛失シタル時ハ直ニ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ其手形ノ流通ヲ止ムル旨ヲ廣告シ又電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ支拂人ニ通知シ其支拂ヲ止メシム可シ○第四十一條 手形紛失人ハ振出人ニ紛失ノ旨ヲ證シ代手形ヲ請受ケ各裏書人ヲシテ再ヒ之ヲ裏書セシノ更ニ其手形ヲ流通スルコトヲ得但振出人ハ手形紛失人ヲシテ保證ヲ立テシムルコトヲ得○第四十二條 手形紛失人代手形ヲ受ケサル時ハ支拂期限ニ至リ支拂人ニ對シ真正ノ所持人タル旨ヲ證明シ支拂ヲ請求スルコトヲ得但支拂人ハ手形紛失人ヲシテ保證ヲ立テシムルコトヲ得

第二章 約束手形

第四十三條 約束手形ハ振出人記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ自ラ支拂フ可キ旨ヲ約束シタル證券ヲ謂フ○第四十四條 約束手形ハ定期拂ニシテ金額ハ貳拾五圓以上ニ限ル者トス○第四十五條 爲替手形ニ付キ定メタル規則ハ第三節第六節其他約束手形ノ性質ニ反スル條目ヲ除クノ外之ヲ約束手形ニ適用ス可シ

第三章 通則

第四十六條 第三十五條第三十六條ノ要求期限ハ路程ニ要スル日數八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フルモノトス第三十五條第三十六條ノ要求期限及ヒ第九條呈示ノ期限外國ト關係スルモノハ其路程ニ要スル相當日數ノ猶豫ヲ與フルモノトス 第四十七條 第一節第四節及ヒ第四十三條第四十四條ノ規程ニ合セサル手形ハ裏書ヲ以テ所有權ヲ移轉スルコトヲ得ス

石油取締之部

(百九)石油取締

規則

明治十六年二月十五日御布告第六号

明治十四年(八月)第四十号及ヒ同年(九月)第五十号布告石油取締規則左ノ通改定ス但執行日限ノ儀ハ明治十五年(八月)第四十四号布告ノ通タルヘン

石油取締規則

第一條 石油ヲ分テ二種トシ閉塞發焔試驗法ヲ用ヒ攝氏驗温器三十度(華氏八十六度)以上ノ温度ニ達セサレハ發焔セサルモノヲ第一種トシ卅度ニ達セズシテ發焔スルモノヲ第二種トス○第二條 點燈用ニ供スルハ第一種ノ石油ニ限リ第二種ノ石油ハ醫療製藥調劑及ヒ物理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用ユルヲ許サス○第三條 石油營業者ヲ分テ礦業者精製者問屋及ヒ小賣商ノ四類トス其營業者ハ都テ管轄廳(東京府下ハ警視廳)ノ許可ヲ受クヘシ但二類以上兼業スルキハ別ニ其許可ヲ受クヘシ○第四條 石油ノ種類ハ内務卿ノ必要トスル地方ニ於テ檢査員ヲシテ之ヲ檢査セシムヘシ 石油ハ檢査済ノ証アルニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サス但礦業者ヨリ精製者ニ販賣スルハ此限ニアラス○第五條 檢査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五石以内第二種ノ石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ限ルヘシ○第六條 石油營業者前條第十三 爲替手形約束手形條例之部 百十五

制限外ノ石油并ニ檢査未済ノ石油ヲ貯藏スル場所建物及ヒ精製所ノ構造方ハ都テ管轄廳
 (東京府下ハ警視廳)ノ認可ヲ受クヘシ○第七條 第二種ノ石油ハ精製者問屋ヨリ直ニ幣
 用者ニ販賣シ小賣商ハ第一種ノ石油ニ限リ販賣スルヲ得ルモノトス○第八條 第二種ノ
 石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ趣旨年月日住所氏名ヲ詳記シタル書付
 ナ取り置キ一年間保存スヘシ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マテトス○第九條 石油ヲ運搬
 スルトキハ其石油タルコトヲ表記スヘシ但其積卸ニ必用ナル時間ノ外物揚場又ハ路傍ニ
 置クヘカラス○第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス
 右奉 勅旨布告候事

(百十)石 明治十六年三月十五日御布告第十号

油取締規則施行延期御布告

明治十五年(八月)第四十四号及本年(二月)第六号布告石油取締規則施行日限ノ儀ハ退テ
 右奉 勅旨布告候事

○第十四 民法

婚姻相續養子養女分家合家離婚之部

(一)華族 明治三年閏十月十七日御布告

一華族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事但癡疾及ヒ事故ニ罹リ候輩ハ此限ニアラ
 ス○一嫡子孫嫡年十一歳ヨリ云々(本項ハ五年百三十七号)○一實子無之輩ハ年齢ニ不拘

(二)士族 明治三年閏十月十七日御布告

一士族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事○一實子無之候ハ、年齢ニ不拘養子願之
 儀可爲勝手事

(三)華士 明治四年八月廿三日御布告

華族ヨリ平民ニ至ル迄互婚姻破差許候條双方願ニ不及其時々戸長ニ可届出事但送籍方ノ
 儀ハ戸籍法第八則ヨリ十一則迄ニ照準可致事

(四)華士 明治六年一月廿二日御布告第廿八号

今般華士族家督相續ノ儀ニ付左ノ通被相定候條此旨相違候事
 家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘシ若シ亡没或ハ癡篤疾等不得止ノ事故アレハ其事實ヲ
 詳ニシ次男三男又ハ女子ニ養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相
 續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ答可申付事 婦女子相續ノ後ニ
 於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子ニ相續可相讓事(以上二項ハ六年二
 ナ以テ改) 幼少ニシテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相撰後見可爲致事
 當主隱居致シ實子又ハ養子家督相續致シ候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病死
 致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ聞届不苦事但再相續人ト可稱事 當主壯健ナ

第十四

婚姻相續養子養女分家合家離婚之部

レ疾其外無據事故有之養子致シ候所前當主疾病平愈又ハ事故相解候節再家督致シ右
養子ハ實家へ立戻リ候歟又ハ當主他へ縁付候共双方熟談ノ上願出候ハ、聞届不苦事 本
家分家親戚等ノ内當主病死云々(本項ハ九年七十五号御布)父兄伯叔総テ目上ノ者子弟甥
等ノ目下ノ家ヲ繼承スルキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘカラス 當主死去跡嗣子無之婦
女子ノミヨテ已チ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許云々(本項ハ自今無用
之)右之通候條華族ハ管轄廳ヨリ正院へ相伺士族ハ管轄廳ニ於テ聞届申事

(五)外國
人ト婚姻
御差許
告

明治六年三月十四日御布告第百三十三号
自今外國人民ト婚姻差許左ノ通條規相定候條此旨可相心得事
一日本外國人ト結婚セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ 一外國人ニ嫁シタル
日本ノ女ハ日本ハタルノ分限ヲ失フヘシ若故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復セシヨ
願フ者ハ免許ヲ得能フヘシ 一日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人
ルノ分限ヲ得ヘシ 一外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖モ日本ノ不動產
ヲ所有スルヲ許サス但シ日本ノ國法並ニ日本政府ニテ定タル規則ニ違背スルコトナクハ
金銀動產ヲ持携スルハ妨ケナシトス 一日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲スモ亦日本政府
ノ允許ヲ受クヘシ 一外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タル
ノ分限ヲ得ヘシ 一外國ニ於テ日本人外國人ト結婚セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在
留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府へ届
出ヘシ

(六)離婚
御付御
布告

明治六年五月十五日御布告第百六十二号
夫婦ノ際已ムナ得サル事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯セス之レカクメ數年
ノ久キヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權利ヲ妨害スルモノ不少候自今右様ノ事件於有
之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所へ訴出不苦候事

(七)婚姻
養子女
等戸籍
不登記
中無効

明治八年十二月九日御達第百九十九号
婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離縁縁飯令相對熟談ノ上タリテ双方ノ戸籍ニ登記セ
サル内ハ其効ナキモノト看做スヘク候條右等ノ届方等關ノ所業無之様精々論說可致置此
旨相達候事

使府縣

(八)合家
御付御
布告

明治九年五月二十日御布告第七十五号
明治六年(二月)第廿八号第五項及ヒ同年(八月)第三百一十号ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議
ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事但シ從前已ニ合家セシ分ハ今後左ノ通可取扱事
一分家セント欲スル者ハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復舊スルコトヲ許ス其子孫ニ至テ
ハ七年第七十三号布告分家ノ例ニ據ルヘシ 一戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關係ニ於テハ戶
主ノ血屬ハ等親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬タルヘシ 一士族平民合家セシ者ハ總
テ士族ニ編入スヘシ

使府縣

(九)士族
戶主後
件見人ノ

明治十年十二月廿八日御達第九十九号
平民養子相續人等ノ儀ニ付明治九年(六月)第五十八号ヲ以テ相達候處士族ト雖モ同様取
計不苦候條此旨更ニ相達候事

私生ノ子之部

(十)私生 明治六年一月十八日御布告第廿一号
妻妾ニ非テサル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事
但男子ヨリ己レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戸長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其子其男子ヲ
第十四 婚姻相續養子養女分家合家離婚之部 百十九

父トスルヲ可得事

兵卒他家相續之部

(十一)憲 明治十五年二月九日陸軍省御達達甲第二号

府 縣

兵卒他家相續ノ儀ニ付御達 憲兵卒服役中養子分家又ハ他家相續人ヲラント欲スル者ハ一般ノ下士ニ準シ可取扱儀ト可心得此旨相達候事

年 齡 之 部

(十二)年 齡計算 明治六年二月五日御布告第三十六号

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數事但舊曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月數ハ本年ノ月數ト通算シ十二月月ヲ以テ一年ト可致事

明治九年四月一日御布告第四十一号 自今滿二十年ヲ以テ丁年ト相定候條此旨布告候事

苗 字 名 之 部

(十三)氏 名改稱 明治五年八月廿四日御達第二百三十五号

華族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名並屋号共改稱不相成候事但同苗同名等無餘儀差支有之者ハ管轄廳へ改名可願出事(但書ハ九年五号御布告ヲ以テ改正)

(十三)僧 侶苗字 可相設 明治五年九月十四日御布告第二百六十五号

自今僧侶苗字相設住職中ノ者ハ某寺住職某氏名ト可相稱事但シ苗字相設候ハ管轄廳へ可屆事

(十四)改 名ノ儀ニ付伺 明治十三年一月廿八日内務省ヨリ御伺定

改名ノ儀ハ去ル明治六年六月舊新治縣へ御裁令ノ旨及ヒ當省ヨリ退々伺定候例規ニ基キ農商人ノ戶主營業ノ都合ニヨリ其先代ノ名ニ改稱ヲ願フ者僧侶ノ得度ニヨリ改名ヲ願フ者又ハ同務中ノモノ同苗同稱ノ差支ニヨリ其一方ニ於テ改稱ヲ願フ者等ハ是迄聽許致來候處往々右例ノ外無餘儀趣ヲ以テ改名願出ルモノ有之即チ農商業ノ都合ニアラスシテ幼名ヲ該家舊來ノ通り字又ハ通字ニ改メ或ハ相續ノ際先戶主ノ名ニ改稱スルノ僧侶宗規ニヨリ(得度改名ニアラヌ)改名ヲ願フ者其他凡ソ今日營業ノ都合ニヨリ改名ヲ要スルノ類ニシテ之ヲ前種類ノモノニ比考スルニ事實凡ソ大同小異ノ者ナレハ以後同様聞許致度就テハ明治五年第二百三十五号公布ノ儀別紙案ノ通重テ改正相成様致度此段及上陳候至急仰御裁令候也

別紙

御布告案

明治五年八月第二百三十五号布告但書左ノ通り重テ改正候條此旨布告候事

華族、、、

但同苗同名其營業ノ都合及由緒等管轄廳へ可願出事

朱書 同之通營業ノ都合及ヒ由緒等ニ因リ改名ヲ願出ル者ハ管轄廳ニ於テ其者身家ノ都合不
得止差支アルモノト認ムルキハ改名差許不苦儀ト可心得事

第十四 改名并雇人及人身賣買之部

雇人之部

明治九年九月十一日御達第八十七号

使府縣

(十五)宮
華族令
扶雇入

宮華族ノ輩令扶等雇入ノ儀ニ付テハ明治四年(二月)相達候趣モ有之候處右ハ廢止候條自今華族輩家令扶雇入並ニ雇免ノ節ハ雇主並ニ雇人共各其本管廳へ届出候様可致此旨相達候事

明治十年二月五日司法省御布達甲第一号

去明治六年十二月十日常省第九十号布達ヲ以テ雇人名稱ノ儀相達置候處今後雇濟ノ有無ニ拘ハラヌ雇主雇人相許諾シテ一月以上ノ期限ヲ定メ雇使スル者ハ雇人ヲ以テ論スヘリ候條此旨布達候事

人身賣買ノ禁之部

明治五年十月二日御布告第二百九十五号

一人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意ニ任セ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マシキ事ニ付古來制禁ノ處從來年期奉ハ等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實賣買同様ノ所業ニ至リ以ノ外ノ事ニ付自今可爲嚴禁事 一農工商ノ諸業習熟ノ爲ノ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ候得共年限滿七年ニ過シ同カラサル事但双方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手ニルヘキ事 一平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルヘキ尤モ奉公取納候者ハ證文可相改事 一娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借訴訟總テ不取上候事 右之通被相定候條屹度可相守事

(十七)人
身賣買
嚴禁

明治八年八月十四日御布告第二百二十八号

金錢貸借ニ付引當物ト致候ハ賣買又ハ讓渡シニ可相成物件ニ限リ候ハ勿論ニ候處地方ニ寄リ問ニハ人身ヲ書入致候者モ有之哉ノ趣右ハ嚴禁ニ候條此旨布告候事但期限ヲ限リ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債ヲ償フハ此限ニアラス

契約及証書之部

明治六年五月三十一日御布告第百八十四号

(十八)女
主證印

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日證據ト爲スヘキ者ハ自印相用可申事

(十九)華
族金銀
貸借等
捺印

明治九年五月二十二日御布告第七十六号
華族ノ輩金銀貸借証文及ヒ其他ノ契約書ニ家令家扶ノ名ヲ用ヒ何家何局等ノ印ヲ捺セシ慣習有之處自今都テ本人ノ印ヲ用ユヘシ若シ本人ノ名印ナキモノハ其効無之儀ト可相心得此旨布告候事

明治十年十月十二日司法省御達丁第七十五号

(廿)契約
書解釋
心得

契約證書解釋方法ノ儀太政官へ相伺候處別紙ノ通御指令相成候ニ付心得ノ爲メ此旨相達候事

大審院諸裁判所

伺書ハ略之

契約書解釋心得

一 契約書ヲ解釋スルニハ其文字ノミニ依着スルヨリハ寧ロ其契約ヲ爲シタル双方ノ者ノ旨趣如何ヲ考察スヘシ〇二 一個ノ條款ニ様ノ意ヲ帶ルキハ其契約ノ効ナカラシムヘキ意ニ之レヲ解スルヨリ寧ロ其効ヲ生セシムヘキノ意ニ之ヲ解スヘシ〇三 文詞ニ様ノ

第十四

人身賣買并契約証書及賣買并代人之部

百廿三

意ヲ帶ルキハ其契約ノ意ニ最モ適シタル意ニ之ヲ解スヘシ○四 文意ノ曖昧タルモノハ其契約ヲ結ビタル地方ノ習慣ニ從テ之ヲ解スヘシ○五 習慣上通常記載スル條款ヲ契約書中ニ記セザルモ仍ホ之ヲ記シタルモノト看做スヘシ○六 契約書中ノ條款ハ皆其全文ノ大意ニ從ヒ互ニ相解釋スヘシ○七 疑ヒノ場合ニ於テハ契約ハ其義務ヲ行フ可キ者ノ利益トナル様之ヲ解釋ス可シ○八 契約書中ノ文詞如何ニ泛キトモ其契約ヲ結ビタル双方ノ者互ニ相思擬シタル可シト推知スルヲ得ヘキ者ヲ除ク外ハ之ヲ包含セス○九 義務ヲ解釋スル爲メ契約書中ニ一個ノ事項ヲ掲ケタリトモ其契約上當然ニ包含ス可キ事件他ノ事項ヲ除去シタル者ト看做ス可カラズ

賣 買 之 部

(廿一)新 明治五年三月二十九日御布告第五号
發明品 新發明品專賣免許ノ儀昨未四月及布告置候處御詮議ノ次第有之當分被廢止候尙御取調ノ上遺テ被仰出候品モ可有之事但向後諸物品新發明致シ候者有之候ハ、其管轄地方官ニテ發明品及其工夫ノ手續詳細取調書ヲ以テ工部省へ可届出事
=付御 布告

代 人 之 部

(廿二)代 明治六年六月十八日御布告第二百五十五号
人規則 人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相違候事
代人規則

下

第一條 凡何人ニ限ラス己ノ名義ヲ以テ他ハナシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ○第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル可シ○第三條 凡代人ハ必術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ(本條中「滿二十歲」ノ四字ハ九年四月第十四号御布告ヲ以テ改)○第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス○第五條 凡本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ但其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス○第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ○第七條 委任狀書式左ノ通(委任狀ノ書式ハ略之)○第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長シ委任セントスルキハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

貸 借 之 部

(廿三)丁 明治五年十月廿二日御布告第二百十七号
卯前貸 平民相互ノ金融貸借慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者一般裁判ニ不及明治元年戊辰借不及 正月元日以後ノ分ハ裁判ニ及候事
(廿四)丁 明治六年一月十三日御布告第九号
外以前 昨壬申歲第三百十七号平民相互金融貸借慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者一切不及動産ノ 裁判旨及布告候處動産(金銀衣服家什等)搬運スヘキ者ヲ云フ)不動産(土地家屋等)搬動産ノ 第十四 代人並貸借之部 百廿五

質物裁
判

運スヘカヲサル物ヲ云フ)ヲ質物ニ取候分ハ右期日以前ニ係ルト雖モ取上及裁判候條此
旨相違候事

(廿五)出
訴期限

明治六年一月十三日御布告第十号
金銀貸附證文ノ内返濟期限無之歟又ハ出来次第返却可致等ノ證書設置後日訴出ツルニ於
テハ裁判申渡ヨリ十二月ノ内濟方可申付事但從前今後其無年期貸付中内証返濟ヲ促
スト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ
屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

(廿六)地
所質入

明治六年一月十七日御達第十八号

府 縣

則書入規

先般田地永代質買被差許候ニ付自今質入書入致シ候節ハ左ノ規則ノ通り可相心得事
地所質入書入規則

第一條 金銀ノ借主(地主)ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主(金主)ニ地所ト證文トヲ渡シ
貸主其作徳米ヲ以テ貸高ノ利息ニ充候テ地所ノ質入ト云フ○第二條 金銀ノ借主(地主)
ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主(金主)ニ地所引當ノ證文ノミヲ渡シ借主ノ作徳米ノ全部
又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充候テ書入ト云フ○第三條 金銀ノ借主(地主)ヨリ返濟ス
ヘキ證據トシテ貸主(金主)ニ地所引當ノ證文ノミヲ渡シ借主ヨリ其利息トシテ米又金ヲ
拂ヒ候テモ亦書入ト云フ○第四條 地所ヲ質入ニ致シ候節ハ地所ヲ相渡シ可申其年期
ノ儀ハ三ヶ年ヲ限ル可シ尤三ヶ年以下期限返濟儀ハ勝手タルヘシ且ツ年限取極廉ハ
判然証文面ニ記載致シ置可申事但書入ノ儀ハ地所ヲ相渡スニ及ハス其年限長短其本文ノ
限ニアラスト雖モ双方相對ニテ取極廉年限ハ本文同様証文面ニ記載致シ置可申事○第五
條 質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談ノ上金銀ヲ返サスシテ地所ヲ引渡候節
ハ舊地主ヨリ金主ヘ可引渡旨別紙ニ相認メ其地ノ戸長加印ノ上金主ヨリ地所相添ヘ確認

ノ証ヲ可願出事(本條ハ十一年第七)○第六條 質入レノ地所ハ金主ニテ其地所耕作可致
等ニ付テハ地租諸役ハ總テ金主ニテ可相勤事但其段管轄應ヘ届出証書可差出事○第七條
書入ノ地所ハ地主ニテ耕作致シ候儀ニ付地租諸役ハ無論地主ヨリ可相勤事但管轄應ヘ
届出ニ不及候事○第八條 管轄違ノ者或ハ同管轄ト雖モ懸隔ノ地所ヲ質ニ取候節ハ其現
地ノ村町ヘ金主ノ名代人相定置其地租諸役ハ差支無之儀可爲相勤事○第九條 質入レ又
ハ書入レ証文ニハ必ス其村町戸長ノ與書印ヲ取ルヘシ其村町戸長ノ役場ニハ與書割印
帳ヲ備ヘ置キ證文ノ與書割印ヲ願出ルルハ帳面ト證文トニ番号ヲ朱書シ割印ヲ押シ與書
ヲ爲シ可シ若シ與書並ニ割印ナキ證文ハ質入又ハ書入ノ證據ニハ不相成ニ付右證文ヲ以
テ所出ルニ於テハ負債主財產分散ノ時債主他ノ債主ニ對シ先キ取リノ特權ヲ失ヒ獨リ質
入又書入ナキ金銀貸借ノ處分ヲ可受事但戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長與書割印ス可
シ(本條ハ明治七年第六号)○第十條 一箇所ノ地ニ三重ニ書入レ候儀ハ不相成候
得共若シ第一番ノ金主ヘ引當ニ入レ置候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分
ヲ見込又其地所ヲ引當ニ借添ヘ致シ候儀ハ不苦候尤借主身代限ノ處分ニ相成候節ハ右地
所賣價ノ代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ
金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ雖シ引渡可申若シ賣價ノ金高キテ先ツ第一番ノ金主ヘ元
利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ
分ヲ價フコト並ニ第三番以下ノ金主ニ價フコトハ平常引當ナキ債主ニ身代限償却ノ例ニ從ヒ
外物品賣價代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事但第二番ノ金主ヘ受取候證文ヘハ
地所代價ノ餘分ヲ見込借添候旨ヲ書載可申事(本條但書ヲ除キ本文ハ明治七年第五十二
号御布告ヲ以テ改正セラレ尤但書故ノ如シ)

○第十一條 地所ハ勿論地券ノミナリモ外國人ヘ賣買質入書入等致シ金子請取又ハ借受
候儀一切不相成候事○第十二條 質入年季中天災ニテ地所流亡等其地ノ全形ヲ失フ時ハ
地券ハ消滅スル理ニ付貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ代リ質ニ差入サセ証文書替
第十四 貸借之部
百廿七

ヲ求ムルコトヲ得ヘシ若シ代リ質ニ差入ルヘキ地所物品等之レナキハ訴訟ノ未身代限ノ處分ニ及フヘシ又池成野地成等ニ變換シ或ハ闕崩等ノ爲メニ其地ノ幾分ヲ失フ時ハ變換ノ模様及ヒ殘存ノ大小ニ應シ規則ニ基キテ地券書換願出ヘキ儀ニ付若シ其變換殘存ノ地ハ貸金穀高ノ價ヲナスニ足ラザルト見込場合ニ於テハ貸主ヨリ債主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ增質ニ差入サセ證文書替ヲ求ムルコトヲ得可シ若シ增質ニ差入ヘキ地所物品等無之時ハコレ亦訴訟ノ未身代限ノ處分ニ及フヘキ事但貸主債主相對示談ハ格別ナル可シ(本條ヲ除キ本條ハ)

第十條(同斷) ○第十三條 質入ノ地所年期中天災ニ因リ荒蕪ト相成ハ貸主(金主)ヨリ起返ノ見込ヲ定メ借主(地主)承諾ノ證書ヲ取リ其管轄ヘ可願出尤モ入費ハ借主ヨリ償フ可キ事但借主起返ノ入費ヲ出スル能ハサルキハ證書ヲ以テ其地所ヲ貸主ニ引渡シ可申尤相對示談ノ處置ハ格別ノ事 ○第十四條 當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改メ可申事 ○第十五條 是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季據置不苦尤證文面等前文規則ニ觸レ候廉ハ總テ相改可申事 (本條ハ明治六年布告ヲ以テ) ○第十六條 從來取結ヒタル質入書入ノ約定ニテ明治六年七月卅一日前ニ期限ヲ過去リタル分ニテ債主ニ於テ貸金返濟方ニ付延期ノ勘辨ヲ加フル者ハ來十月卅一日迄ニ其地所所管ノ戶長役場ヘ届出地所質入書入規則第九條ニ準シ與書割印ヲ受クヘシ若シ右日限内與書割印ヲ受ケスシテ後日其證書ヲ以テ訴訟ニ及フ時ハ質入書入ノ證據ニハ相立ヨルニ付裁判上糶賣分配ノ時ハ先取ノ權利ヲ失ヒ質入書入ナキ貸借同様ノ處分ニ及フヘキ事 (本條ハ明治七年第七十六號御布告ヲ以テ加)

(廿七)貸金證書 戶長公證割印
 明治七年五月二日內務省御達乙第三十三號
 本年第六号公布地所質入書入規則第九條改正文中戶長ノ與書證印ハ戶長又ハ副戶長實印ヲ爲押割印ハ戶長役場印ヲ相用候儀ト可心得此旨相達候事但役場印無之候ハ、彫刻申付右出來迄ハ戶長實印ヲ換用可致事

(廿八)壬申二月十五日以後

明治六年二月十四日御布告第五十一號

(廿九)動產不動產

壬申二月第五十号布告ノ通地所賣買被差許候上ハ質地ハ貸借上ノ事柄ニ付翌十六日以後ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前ノ通流地タル可キ事
 明治六年八月廿三日御布告第三百六号
 動產不動產書入金穀貸借規則左ノ通相定候條此旨布告候事

一 動產不動產ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シ右期限中書入ノ動產不動產流亡又ハ燒失ヲ爲スト雖モ負債ハ身代限濟方可申付事 ○一 動產不動產ヲ書入ニ爲シ金穀貸借ヲ爲シ濟方ノ期限ニ臨ミ右書入ノ動產不動產ノ相場高下アリテ糶賣ノ價ヒ負債ノ高ヨリ餘分アル時ハ其餘分ハ借主ヘ與フ可シ若シ其價ヒ負債ヨリ不足ナレハ身代限濟方可申付事 ○一 壬申第三百号布告以前家祿ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シタル分ハ家祿ヲ除キ外物品ヲ以テ身代限濟方可申付事

金穀貸借規則

明治八年六月八日御布告第百二号
 明治六年(六月)第百九十五号布告金穀貸借請人證人辨償規則本年十月一日ヨリ左ノ通改正施行候條此旨布告候事

金穀貸借請人證人辨償規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分(請人證人)ヘ濟方申渡シ猶ホ不相濟ニ於テハ其(請人證人)ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ(請人證人)ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事 ○第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其(請人證人)ハ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、(請人證人)ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

(卅)金穀貸借規則

第十四 貸借之部
 百廿九

○第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雛形之通裁判所ニ於テ其原證文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ヘ可相渡置事

裏書雛形(略之)

明治八年七月廿二日御布告第百二十一号

本年(六月)第百二号金穀貸借請入証入辨償規則布告本文中施行ノ二字ヲ削リ且ツ候條ノ下ニ同日以後借用証書ヘ加印候者ハ改正ノ通可相心得ノ二十二字ヲ加ヘ候條此旨布告候事但右規則第二條ノ節書式文中失踪ノ二字逃亡ト改正候事

明治八年九月三十日御布告第百四十八号

諸建物書入質入規則並ニ賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル十二月一日ヨリ施行可致此旨布告候事

(册一)金穀貸借規則
(册二)建物書入規則
並賣買讓渡規則

建物書入質規則

第一條 金穀ノ借主又ハ預リ主ヨリ返濟スヘキ証據トシテ(貸主預ケ主)ニ對シ引當トナス所ノ建物ノ圖面ト証人トニ戸長ノ公証ヲ受ケタル者ヲ(貸主預ケ主)ニ渡シ置キタルヲ建物ノ書入質ト云フ○第二條 書入質ト爲ス建物自身所有ノ地所ニ建テ在ルキハ書入質証文ニ自身持地ノ建物ナルヲ記入スヘシ又借地ニ建テ在ルキハ書入質ヲ爲ス者其地主ニ請ヒ其地主チシテ貸地タルヲ證スルノ與書ヲ爲サシムヘシ若シ借地ノ建物ニシテ地主ノ與書チキ證文ハ書入質ノ効ナキニ付書入質チキ借用證文ト看做スヘシ但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其借地タルヲ證スルノ與書ヲ受クヘシ(本條但書年第六号御布告)○第三條 金穀ノ(借主預注)ヨリ建物引當ノ證文ト建物ノ圖面トヲ建ヲ以テ追加セラル○第四條 建物書入質ノ證文ニ添フタル圖面中ニ書入質ト爲ス所ノ建物ノ圖ハ朱引朱字ト爲シ書入質ノ外ナル建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲ス可シ(第一号書式及ヒ第二号書式ヲ

見合ス可シ)○第五條 戸長役場ニ於テハ建物書入質記帳帳ヲ備ヘ置キ証文ノ與書割印ヲ願出ル時ハ其大旨ヲ帳面ニ記入シ而シテ帳面ト証文トニ番号ヲ朱書シ割印ヲ押シ與書ヲ爲シ圖面ニモ同シ番号ヲ朱書シ割印ヲ押スヘシ若シ戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長與書割印ス可シ○第六條 建物ヲ以テ金穀借用又ハ預ノ引當ト爲シタル證文ニテ前條ノ規則ニ背キ公證ヲ受ケサル者ハ書入質ノ効ナキニ付書入質チキ(借用預リ)證文ト看做ス可シ○第七條 此規則施行以後建物書入質ノ借用證文又ハ預リ證人ニハ必ス返濟ノ期限ヲ定ムヘシ若シ其期限ヲ定メサル者ハ書入質ノ効ナキニ付書入質チキ(借用預リ)證文ト看做スヘシ(本條ハ明治八年第百九十九号御布告ヲ以テ改正)○第八條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ借用金數又ハ預リ金數ニテ返濟期限ノ定メナキ證文ヲ所持スル者ハ明治九年二月廿八日迄ニ金穀(借主預主)又ハ其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ム可シ若シ(借主預主)又ハ其相續人証文チ改メサルキハ明治九年四月卅日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フ可シ但シ明治九年四月三十日ヲ以テ訴入發途ノ期ト定メ其訴人ノ住所又ハ寄留ノ地所ト裁判所トノ距離每八里ニ一日ノ猶像ヲ與フ○第九條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借用証人又ハ預リ証文チ所有スル者ハ返濟滿期ニ至ルト至ラサルトニ論テ明治九年二月廿八日迄ニ金穀(借主預主)又ハ其相續人ニ掛合ヒ此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ムヘシ若シ(借主預主)又ハ其相續人証文チ改メサルキハ明治九年四月卅日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フ可シ但書前同斷○第十條 建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ於テハ原告人ノ訴狀ヲ受取リタル時ヨリ三日内ニ裁判所ヨリ被告ノ建物ノ在ル地ノ戸長ニ對シタル報知狀ヲ原告人ニ下付シ速ニ戸長ニ送達セシムヘシ右ノ報知狀ニハ何(府縣)管下(住居寄留)何某ノ訴狀ニ因リ何大區何小區何番地ノ建物ヲ書入質ト爲ス証文ニ公書スルヲ差留ムル旨ヲ記載スヘシ而シテ其訴訟落着ニ至リシ時ハ公書ノ差留ヲ解クヲ速ニ戸長ニ報知スヘシ○第十一條

第十四

貸借之部

第八條及第九條ノ規則ニ背キ明治九年五月一日以ニ後至リ此規則施行以前ニ契約シタル
 建物買入又ハ引當ノ金穀(借用預)証文ヲ所有スル者ハ書入質ノ効ナキニ付書入質ナキ
 借用預リ証文ト看做スヘシ○第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ニ爲スハ嚴禁
 ナレモ若シ第一番ノ金主ヘ書入質ト爲シタルコトヲ第二番ノ金主ニ諸ナレハ建物代價ノ餘
 分ヲ見込ニ又其建物ヲ書入質ニ借添ト爲スコトヲ得ヘシ尤借主身代限ノ處分ニ至ルキハ右
 建物糶賣代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ
 金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡スヘク若シ糶賣ノ金高キ以テ先ツ第一番ノ金主ヘ
 元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足
 ノ分ヲ償フコトハ平常書入質ナキ貸主ニ身代限ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ
 相當ノ割賦ヲ以テ引渡スヘシ但第二番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ證人ニハ建物代價ノ餘
 分ヲ見込ニ借添タル旨ヲ齎載スヘシ○第十三條 書入質ト爲シタル建物燒失流亡等ニ至リ
 シ時ハ建物ノ所持主又ハ代理人ヨリ遲ク七日内ニ其取替キテ書面ニ記シ戸長役場ニ届出
 ヘシ戸長役場ニ於テハ建物書入質記載帳ノ朱筆番号ニ引合セ朱筆ヲ以テ點合ヲ爲シ其傍
 ニ燒失流亡等ノ趣ヲ略記シ年月日ヲ記シ戸長ノ實印ヲ押スヘシ(第三号書式ヲ見合スヘ
 シ)○第十四條 書入質ノ建物燒失流亡等ニ至リシキハ貸主ヨリ借主ニ對シ代リ質ヲ受取
 ルコトヲ求メ爲スコトヲ得ヘシ若シ借主代リ質ヲ出スコトヲ肯ハス又ハ出シ能ハサルキハ借用
 金穀返濟期限未滿内ト雖モ貸主ヨリ借主ニ對シ元利返濟ヲ求ルノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

建物買入質規則

第一條 自身所有ノ地ニ建テ在ル建物ヲ賣渡シ又ハ讓渡シ爲サント欲スル者ハ(賣渡讓
 渡)証文ト圖面トニ戸長ノ實書割印ヲ受クヘシ又借地ニ建テ在ル建物ハ(賣渡讓渡)証文ニ
 ハ其地主ニ請ヒ地主ヨリ貸地タルコトヲ證スルノ實書ヲ受ケタル上ニテ戸長ノ實書割印ヲ
 受ク可シ但シ官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ實

下

書ヲ受クヘシ(本條但書ハ明治十年第卅)○第二條 建物ノ買受ケ又ハ讓受ケ爲サント欲
 スル者ハ自身又ハ其代人建物ノ在ル地ノ戸長役場ニ至リ建物書入質記載帳ヲ見合セタル
 上其(賣渡讓渡)ノ証文ヲ受取リ然シテ後ニ戸長役場ニ至リ戸長又副戸長ノ面前ニテ何大
 區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ(買受讓受)タル旨ヲ書入質記載帳ニ記入シ年月
 日並ニ苗字名ヲ記シ實印ヲ押スヘシ若シ云々(若シ)以下ハ明治十年第(若シ)○第三條 戸長
 役場ニ於テ建物(賣渡讓渡)証文ノ實書割印ヲ願出ル時ハ是亦建物書入質記載帳ニ記入ス
 ルコト及ヒ証文ニ實書割印スルコト建物書入質規則第五條ニ準シ公證ヲ與フルコトヲ手
 續クナスヘシ○第四條 書入質ト爲リタル建物ヲ(買受讓受)タル者其建物ノ書入質トナ
 リタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但(買受讓受)人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スル時ハ書
 入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス○第五條 第四條ノ場合ニ於テ戸主ノ跡ヲ受ケタ
 ル相續人ハ前戸主ヨリ讓受ケタル建物所有ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引
 受ク可シ(第一号第二号第三号書式トモ略之)

明治九年七月六日御布告第九十九号

金穀等借用証書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ証書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ
 書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡証書有之モ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事
 但相續人ヘ讓渡候ハ此限ニアラス

明治九年十月十七日御布告第三百三十号

各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則自今左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡一區ニ於テ金穀ヲ公借シ若シハ共有ノ地所建物等ヲ賣買スルハ正副區戸長並
 ニ其區内每町村ノ總代二名ツノ内六分以上之ニ連印スルヲ要スヘシ○第二條 凡ソ町
 村ニ於テ金穀ヲ公借シ若シハ共有ノ地所建物ヲ賣買スル時ハ正副區戸長並ニ其町村内不
 動產所有ノ者六名以上之ニ連印スルヲ要スヘシ但シ右不動產所有者ヨリ其總代ヲ撰ンテ

第十四

貸借之部

百卅三

(卅三)權
 利ノ讓
 渡ハ借
 主ノ承
 諾ヲ要
 スル御
 布告

之レカ代理ヲラシムルハ其都合ニ任スヘシ○第三條 凡ソ區内若リハ町村内ニテ土木ヲ起功スル時ハ其區ト町村ナルトニ從ヒ各第一條若クハ第二條ニ依リテ○第四條 若シ第一條第二條及ヒ第三條ニ指示セル場合ニ於テ唯正副區長ノ印ノミヲ鈐シ其須要ナル連印ナキモノハ總テ之ヲ該區戶長限リノ私借若クハ私ノ土木起功ト看做ス可シ其正副區戶長ノ印ノミヲ以テ共有ノ地所建物等ヲ賣買シタル者ハ總テ賣買ノ効チ有セス

(卅四)船

人民所有ノ船舶ヲ賣買シ又ハ金穀等借用ノ爲メ書入質トナサントスル時ハ明治八年(九月)第四百八十八号布告諸建物書入質及賣買讓渡規則ニ準據シ賣主又ハ書入主ヨリ其船ノ圖面ト約定證書ニ本船管轄地戶長ノ公證ヲ受クヘシ若シ右ノ手續ヲ爲サ、ルニ於テハ其約定證書ハ裁判上尋常金穀貸借證書ト見做スヘシ但從前書入質ト爲シタル分ハ明治十年六月三十日迄ニ本文ノ手續ヲ以テ更ニ約定書改正可致尤航海中或ハ不得止事故アリテ右期日マテ書換難致者ハ其旨像メ本船管轄地戶長役所ヘ届置クヘシ

(卅五)社

神社並寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ル、トキ若クハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地(除稅地ヲ除クノ外)建物什器(賣物古文書類ヲ除クノ外)等ヲ抵當ト爲スキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ仮令右ノ抵當アルモ其効チキモノト爲スヘシ此旨布告候事

(卅六)利

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事
第一條 凡金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス○第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十二(二割)百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ十二(一割二分)以

下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ引直サシムヘシ○第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高チ定メサルトキ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六(六分)トス○第四條 第二條ニ依リテ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アルハ總テ裁判上無効ノ者トス○第五條 返還期限ニ違フタルキハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金料等ヲ差出スヘキトシ約定スルコトアルハ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルキハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スヘキトシ得

(卅七)連

金穀其他借用証書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失跡又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者ヘ償却可申付候條此旨布告候事但右証書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明証アルハ此限ニアラス

(卅八)戶

戶長ニ於テ地所建物船舶賣買讓渡及ヒ質入書入ノ公証ヲ爲スヘキ際該物件又ハ所有主ノ身分ニ關シ既ニ訴訟ヲ起シ公証猶豫ノ儀申立ル者アル時ハ其裁判ヲ執行シ得ヘキ迄公証ヲ爲スヘカラス右奉 勅旨布告候事

(卅九)以

預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判可致候條此旨布告候事

(四十)預

預ケ金穀ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラス受理スヘキ成規ニ候處自分二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不

及候條此旨布告候事

(四十一) 明治十七年三月十七日御布達第五号

明治十五年十二月第六十号布告ハ勸解又ハ刑事告訴中ナルヲ以テ公証猶豫申立ル者アル

場合ニモ適用スベキモノトス

右布達候事

御布告

ニ付御

布達

○第十五 訴訟法

呼出之部

(一) 民事 明治六年六月八日司法省御達第八十九号

裁判上ニ於テ諸官員ノ内相手取ラレ且引合等有之呼出ニ及ヒ候節判任以下ニテモ是迄其
所轄省ヲ經テ本人ハ相達來候右ハ全ク一身ノ私事ニ係リ候儀ナク其省ヲ致經由候テハ
諸事淹滞ハ不及申自然種々ノ都合ヲ生シ候ニ付キ以來裁判所呼出ノ儀ハ判任以下ハ直
ニ之ヲ達シ其所轄省ヘハ本人ヨリ届出候様可致此段相達候事

(二) 前同 大審院諸裁判所 明治十年十月三十一日司法省御達丁第八十一号

本年第七十一号布告ヲ以テ六年第四百五号布告被廢候ニ付勅奏官及ヒ華族ハ民事裁判上
其家令執事ヲ喚問スヘシ若シ其本人喚問イタサス候テハ事實差支アル場合ニ於テハ時々
奏請ヲ經テ喚問スヘシ候條此段爲心得相達候事但勸解ニ付喚出ノ節モ同様ナルヘキ事

(三) 遅不 明治十年一月十七日御布告第五号

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受ケタルモノノ疾病等ノ事故アリテ遅參又ハ不參ナル時ハ其事故ヲ詳
記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ届出ルカ又ハ無届ニテ遅參
不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ右布告候事

出訴期限之部

(四) 出訴 明治六年十一月五日御布告第三百六十二号
期限 第十五 呼出並出訴期限之部

金銀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ双方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イダシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴致シ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請入証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免カレ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 飲食料
- 一 職人ノ手間代金
- 一 男女藝者ノ揚代金
- 一 一旅籠料
- 一 手附金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
- 一 運送費
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 請負金

第二條

- 一 醫師ノ診斷及ヒ藥料
- 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
- 一 一授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
- 一 一商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
- 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸付米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
- 一 証據金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料
- 一 一七ヶ年期マテノ奉公人給料
- 一 一小作米金
- 一 一敷金
- 一 一養育料
- 一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年
- 右ハ五ヶ年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ以テ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一 從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又從前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事但明治五年壬申第三百号布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

明治九年四月十七日司法省御達達第四十四号

(五) 勸解
中出訴
期ノ儀

各裁判所
縣

區裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解出願候者勸解中出訴期限滿期ノ者處置方左ノ通可相心得此旨相達候事

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ滿期ニ至ル者ハ其勸解不調ノ翌日ヨリ滿三十日
第十五 出訴期限並代官人之部
百卅九

日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フ可シ○第二條 勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ府縣裁判所ニ出訴ヲ爲サトルニ於テハ其事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタ者ルト見做スヘシ

(六)課税 明治十年五月十日御布告第二十二号
課税ニ關スル處分ニ付不服アリテ出訴セントスル者ハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領収證書ヲ添其翌日ヨリ六十日以内ニ訴出ツヘシ但納税期限前ニ訴出訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課額ヲ上納スヘシ百奉 勅旨布告候事

(七)備荒 明治十年十二月二十八日御布告第七十四号
備荒儲蓄金及區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ニ關シ不服アリテ出訴セシトスルモノハ都テ明治十五年五月第二十二号布告ニ依ルヘシ右奉 勅旨布告候事

代 言 人 之 部

(八)代 言 明治十五年五月十一日司法省御布達甲第二号
滿期後 代理人滿期ニ至テ尙ホ引續キ免許願出ノ者其免許狀附與候迄ノ間ハ右滿期以前出訴ニ及取扱ヒヒ取扱掛リノ事件ニ限リ代官若カラス候條此旨布達候事但再ヒ免許セサル者ト雖モ本文同様心得可シ

(九)代 言 明治九年十月四日司法省御布達甲第十五号
試驗落 第一代官人試驗ヲ受ケ落第シタルモノ再試驗ヲ願フシトスルモハ次ノ期月ヲ待ツヘシ○一再度以上落第セシモノハ再度ノ期月ヨリ第三回目期月ニ至ラサレハ試驗ヲ願フコト得ス○二試驗再度以上ニ係ルモノハ其旨ヲ願狀ニ附記スヘシ
右布達候事
明治十二年三月十九日司法省御布達甲第一号

(十)代 言 滿期引續營業
明治十二年三月十九日司法省御布達甲第一号

(十一)代 言 人 規 則

代官人免許願ノ備出願期月相定置候處自今右期限ニ關シ候廉ハ一切相廢シ候此旨布達候事但引續營業ヲ爲サント欲スル者ハ必ス免許滿期前ニ願出ヘキ事

明治十三年五月十三日司法省御布達甲第一号
明治九年當省甲第一号代官人規則左ノ通改正候條此旨布達候事但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止スル可シ

代 言 人 規 則

第一條 總則
第一條 代官人ハ法令ニ於テ代官ヲ許サレタル詞訟ニ付原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代官ヲ爲ス者トス○第二條 代官ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四條ニ掲ケル所ノ手續ニ依リ定式ノ試驗ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受ケ可シ○第三條 免許ヲ受ケシ代官人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代官ヲ爲スヲ得○第四條 代官人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
- 二 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
- 三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者
- 四 國事犯ヲ除クノ外懲役並ニ禁獄
- 五 官吏準官吏及ヒ公私ノ雇人

一年以上ノ刑ヲ受ケタル者

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲ケル所ノ代官人ノ組合ニ入りテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代官ヲ爲スモハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ○第六條 代官人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事(檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者以下之ニ倣フ)並ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ○第七條 代官免許ハ滿一年(月ヲ以テ算フ)ヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還附セス○第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ケル

第十五 代官人之部
百四十一

時免許料ヲ直ニ檢事ニ納ムヘシ 引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタル時ハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代官ヲ爲スヲ得可シ○第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代官ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ○第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代官人タルノ証ト爲ス可シ○第十一條 代官ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ○第十二條 代官人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分スヘシ○第十三條 代官人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代官人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ以テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ

一 互ニ風儀ヲ矯正スル事
二 名譽ヲ保存スル事
三 法律ヲ研究スル事
四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事
五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事
六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事
七 故ナク時日ヲ遷延セサル事
八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閣ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長者ヲ以テ之ニ充ツ可シ○第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル

者ト雖モ其職繼スルハ三期ヲ以テ限リトス○第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代官人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ 若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代官人ヨリ直チニ檢事ニ告發ス可シ○第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例トナシ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但其會費ハ各代官人ニ於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス○第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年輪及ヒ代官免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ○第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツ可シ○第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代官ノ職業ニ付テハ一般ノ代官人ト異ナルコトナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代官人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
三 訟廷ニ於テ相手方ヲ陵辱罵詈シタル者
四 詞訟ヲ教唆シタル者
五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
七 強テ謝金ヲ前収シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ビ号ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者

第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
第十五 代官人之部

一 罷責
 第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ○第二十五條 罷責ハ止テ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一年以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ラサレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス 第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現住（戸長又ハ區長）奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ
 第二十七條 出願定月 二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス○第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

一 民事ニ關スル法律

二 刑事ニ關スル法律

三 訴訟ノ手續

四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書々式（書式ハ之ヲ略ス）

明治十七年一月廿四日御布達第一号

(十二)勸解又ハ詞訟上代人ノ制限

明治十三年五月司法省甲第二号布達左ノ通改正ス
 詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受クヘシ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ右布達候事

明治十四年一月廿四日司法省御布達甲第二号

(十三)代言人規則中改正

司法省明治十三年甲第一号布達代言人規則第四條第四項左ノ通改正候條此旨布達候事
 第四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者

負債者失踪後訴訟之部

(十四)義務者失踪後訴訟手續

明治八年一月廿日御布告第六号

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失 知ル時ハ定期滿期ニ至リ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事○第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定期滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツ可キ事○第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長へ申付ケ失踪ノ年月日ヲ説明シタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ係リ此裏書証書ヲ以テ再訴可致旨ヲ記載シ訴狀下ケ戻ス可キ事○第四條 債主ニ於テ前條裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年（十一月）第三百六十二号布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

院省府縣ニ對スル訴訟之部

(十五)官廳對府ニ對スル訴訟規則

明治七年九月二日司法省御達第廿四号

各裁判所各縣
 今般人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則別冊ノ通相設メ候間以後右ニ準據可致候條此旨相達候事

別冊
 第十五 義務者失踪後訴訟及官府ニ對シ訴訟之部 百四十五

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟假規則

第一條 凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニテサレタル人民一個ノ訴訟ハ司法官ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ但闔區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做ス可シ

- 一 官府所有ノ土地ニ關シタル事
- 一 官府ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事
- 一 官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル官府ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ミ差出スヲ得ヘシ其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サ、ルヲ得サルトキハ其本人ヲ呼出スヲモアルヘシ但委任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處ス○第三條 裁判上官府ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルトキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具上申稟スヘシ 若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還スヘキハ具上申稟スルニ及ハスト雖モ事情已ム事得ザル場合ニ於テ官府ヨリ償還セサルヲ得サルトキハ具上申稟スルヲ前項ニ同シ但具上申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ終審トシ更ニ控告スルヲ得ス○第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ歸スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴フル者アルトキハ先以之ヲ具上申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フヘシ

- 一 官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一 道路ヲ作ルルニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一 工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事

一 此官廳ト彼ノ官廳トニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

(十六)官府ニ對スル訴訟
(十七)郡區戶長ニ對スル訴訟

明治八年五月廿九日司法省御布達甲第五号
各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理候條此旨布達候事
明治十四年八月五日司法省御達甲第四号
從來人民ヨリ郡區長及戶長ノ職務上ニ對スル訴訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨布達候事但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來候振合ニ可準候事

控訴上告之部

(十八)控訴上告
手續

明治十年二月十九日御布告第十九号
明治八年(五月)第九十一号布告大審院諸裁判所職制章程同年(同月)第九十三号布告控訴上告手續別冊ノ通り改正候條此旨布告候事但巡廻裁判規則判事職制通則ハ刪除候事

第一章 控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ○第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス○第三條 控訴ハ一ダヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス○第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ其裁判言渡ヨリ第七日マテニ(裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ)裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ヨリ至リ控訴スルヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヲ得○第五條 地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ二月(二十日ヲ以テ)過クルモ控訴スルヲ許サス但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キモハ期限二月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増

第十五 控訴上告之部

（本條「二ヶ月」ノ三字ハ明治十
五年第廿一号御布告ヲ以改正）
第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁
判所ニ届出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フコト及ハス
第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所
ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルハ地方裁判所ニ於テノ訴狀
答書口書裁判見込等ヲ差出ス可シ
第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照
準ス可シ

第二章 上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管轄ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキ
ノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス
第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越
ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得
第十三條 凡上告シタル者已ニ大審院ノ判決
ヲ經レハ更ニ訴フルヲ得ス

第十三條 民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限
ル
第十五條 上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二ヶ月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧
クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルコトヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里
ヨリ遠キ時ハ二ヶ月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定規ヲ過クレハ上告スルコトヲ許サス
上
告狀中ニハ必ス左ノ事件ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 被告人ノ住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニ

第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サ
レテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡
レタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日
上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘ
シ

第一 地方裁判所ニ於テノ訴狀並ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 上等裁判所ニ於テノ訴狀並ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ證據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番号ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ葉
數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者
右ノ訴狀又ハ答書及ヒ證據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊
ヲ訟廷ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルコトヲ得ヘシ
若シ原裁判所ニ於テ書類寫
取ノ出願ヲ許サルハニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ
第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高キ預ケサル
ルハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルルハ其預リ金ヲ沒收ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預
リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム
（被告人トハ上告
者ノ相手方ヲ云）
第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ
大審院ニ遞送スヘシ
第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停止メス大審院已ニ原裁判ヲ
破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ
（大審院ヨリ
郵便ヲ發ス）
執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ
至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ但シ内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又

第十五 控訴上告之部

ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ○第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧ルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ルモ本人ノ意ニ任ス○第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ○第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日內ニ被告入呼出狀ヲ仕出スヘシ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ○第二十二條 被告入ハ呼出シ狀ヲ受取タルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧ルヘシ但被告入ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ○第二十三條 大審院ニ於テ被告入ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命ジ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被告對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被告對審ノ呼出狀ヲ原被告雙方ニ送達スヘシ○第二十四條 原被告對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末書ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被告交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ○第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章 刑事上告ノ事
 第廿六條 違警罪及死罪ヲ除クノ外一切ノ刑事皆上告スルコトヲ得○第廿七條 刑事ニ付上告スルコトヲ得ヘキノ人

第一 刑ノ言渡ヲ受ケタル者 第二 檢事 檢察官ニキリ地方ハ警
 第廿八條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サント欲スル時ハ其言渡ヨリ第三日迄ニ三日
 決行 上告願狀ヲ其裁判所ニ捧ケ又第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ捧クヘシ但シ裁判所ハ決
 セス 放チ執行スル所ノ地方官ニ其事ヲ達スヘシ (本條以下ハ新法ニ於テ
 制定セラレシナリ以略之)

訴訟入費之部

(十九)訴訟入費

明治九年四月二十二日司法省御布達甲第五号

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事

第一條

訴狀並其外書類認料

一枚十六行十五字詰ニ付
十錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル
ノ書類ノ寫 證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被告双方往復ノ文書

第二條

證人並ニ引合人差添人手當

一日ニ付五十錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席シタル日

第三條

證人並引合人差添人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五十錢

第四條

證人並引合人差添人旅費 滿八里ニ付十錢歸路モ同斷 但八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十

錢 右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ申路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算スヘ
第十五 訴訟入費之部 百五十一

シ〇第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノ、爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五十錢 但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス 右定限 第二條ニ同シ

第六條

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當 一日ニ付五十錢

第七條

原告人又ハ被告人直者旅費 滿八里ニ付十錢歸路モ同斷 但八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十錢 右定限 第四條ニ同シ

第八條

通辨雇料 一日ニ付三圓 右定限 第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算ス可シ

第九條

翻譯料 一枚ニ付十六行十五字詰二圓但シ一枚以下モ同價 右定限 第一條ニ同シ

第十條

測量繪圖認料 右定限

- 第一 長三百間ニテ盡ル時ハ百間ニ付一尺ノ割 西ノ内一枚ニ付十錢
 - 第二 長六百間迄 百間ニ付五寸ノ割 同 十二錢
 - 第三 長千二百間迄 百間ニ付三寸ノ割 同 十四錢
 - 第四 長六千間迄 百間ニ付二寸ノ割 同 十七錢
 - 第五 長一萬二千間迄 百間ニ付一寸ノ割 同 二十錢
 - 第六 長一萬二千間以上 百間ニ付五分ノ割 同 廿四錢
- 一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ但

西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條

使賃 滿一里毎ニ十錢一里未滿ハ五錢 但シ歸路モ同斷 右定限

第一 裁判所ニテ示談中双方承諾ノ上原告被告双方又ハ一方ノ者ヨリ遣ハシタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ賣ムル使賃

第四 原告被告双方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ双方又ハ一方ノ者ノ中立ニ因リ裁判所ヨリ

臨時ニ遣ハシタル使賃

第十二條

郵便並ニ電信料 定價 右定限 第十一條ニ同シ

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又町役場ニ納ムヘキ評價人鑑定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費臨時計算ヲ以テ定ム 右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

身代限之部

(廿)身代 明治五年六月廿三日御布告第百八十七号

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

第十五

身代限之部

- 一時服着替共男女共各二通宛
- 一本ノ職業者爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ撰ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者ノ類 一人宛差出シ外入札人ト共ニ人札致サセ 町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事
- 一食料 家族ノ人口ヲ量リ一月間用ヒル飯米ヲ殘シ置クヘキ事但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事
- 一鍋釜及炊具各一通
- 一華士族身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品物
- 一家祿 但人口ヲ量リ年々飯米ヲ引殘シ其分無キ歟或ハ不足ノ者ハ其米高ヲ返金濟燼金主ヘ渡サセ候事
- 一大小類男子一人ニ付各一腰宛
- 一冠服男子一人ニ付各一通宛
- 一時服着替共男女共各二通宛
- 一夜具男女共各一通宛
- 一本ノ職業者爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類及ヒ諸器械品物等其金額五十兩ニ致ル迄最モ本人ノ撰ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者ノ類 一人宛差出シ外入札人ト共ニ人札致サセ 町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事
- 一鍋釜及炊具類各一通有身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅ヘ揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取札ノ上可處置事但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ヲ記載セシムヘシ
- 一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ヘシ但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

(廿一)同居身代限ノ時別
(廿二)僧侶身代限

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ最モ金銀器等定價判然タル物品ハ其價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且賣金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過クヘカラス但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ鑑定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ 町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ニ差出スヘシ

明治五年九月十八日御布告第二百七十五号

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財產ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其証券中本家ノ戸主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財產ヲ目的トシ貸與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者其返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ物品ノミ分産異居ノ者ハ其財產ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲必得此段相違候事

明治六年三月五日御布告第八十八号

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左ノ通被相定候條此段相違候事

- 抵償トシテ差押フ可ラサル品類
- 一食料 寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事
 - 一建物 法用ニ必要ナル箇處但本堂等ヘ建築候共榮耀ニ屬スル箇處ハ此限ニアラス
 - 一寄附帳ニ記載スル部分 一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分 一法衣寺主並所化及尼共各一通宛 一時服着替寺主並所化及婦女共各二通宛
 - 一夜具寺主並ニ所化及婦女共各一通宛 一鍋釜及炊具類各一通 一本人職業ヲ爲スニ
- 第十五 身代限之部 百五十五

(廿三)僧侶身代

必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ
明治六年三月五日御布告第八十九号

御制定ニ付寺院ニ於テ寄附物帳及ヒ什物帳ヲ設ク可キ御布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分并ニ古來傳承ノ寺寶等ノ判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置キ可申候
一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ル迄詳細ニ記載スヘシ
一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分并ニ寺寶ヲ區別シ記載ス可シ
一右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上并ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役場ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置クヘシ
右之通候事

(廿四)身代限規則

明治六年七月十七日御布告第二百五十二号

告

負債者身代限リニ遇フ節其者ヘ對シ貸金穀其義務ヲ得ヘキ者定約期限内ノ分處置振左ノ通被相定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ
第二條 約定期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受クルコトヲ得ヘシ
第三條 請人証人等連印ニテ本人返濟相滞ルニ於テハ引受ケ返濟可致ノ明文之レアル証書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人証人ニ係リ之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ
第四條 身代限ニ遇者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セムコト欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動產ヲ引當又ハ質物トナシ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルコトヲ必要トス
第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動產ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキ

(廿五)身代限先取權ノ所

明治八年四月十日御布告第五十三号

取權ノ所
証書所
持主ヘ
金員配
分方

キ証明シ原告人之ヲ承諾スル時ハ其原告人ハ今回身代限財產糶賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス
第六條 約定期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動產ヲ引當又ハ質物ニ取置タル債主ハ右動不動產ヲ身代限ノ糶賣金ニ爲スニ付己レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルコトヲ得ヘキ而巳ニテ糶賣金ノ内ニテ拒ムコトヲ得ヘカラス
第七條 動不動產ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其約定証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ルヘキノ求メヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金ノ分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置キタル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ
第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ルヘキノ求メヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

(廿六)身代限者

明治七年九月四日司法省御達第廿三号

貸金証書處分

金穀ヲ借り返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遇フ時所有物ノ内他人ヘ貸附置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十号布告ヲ以テ相達候

第十五 身代限之部

百五十七

各裁判所各府縣

處詮議ノ次第有之左ノ通改正候條此旨相違候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限リニ遇フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遇フ者ヨリ他人へ貸附置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定期期限ノ満未滿ヲ論セテ証文ニ記名シタル負債主へ眞偽ヲ尋テ相違ナキ時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ遇フ者ノ債主へ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

○第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルルハ好マサル時ハ其証文ハ身代限ニ遇ヒタル者ニ所持致サセ置クヘキ事但シ定期期限ノ証文ニテ負債主ノ家財些少ナルモ身代限ニ遭フ者イ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受ケ度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事○第三條 債主數名ニシテ身代限リニ遭フ者ヨリ他人へ貸附置タル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致サセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シソノ落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事但數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事○第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ト引去リ其餘金ハ証文ニ記載シタル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル受取リ書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事○第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ラントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ証文ニ記名シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサル時ハ証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事但此時裏書キニ身代限ニ遭フタル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ一通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ○第六條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時証文ニ記載シタル債

主即チ裏書キニ身代限ニ遇ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタルトキハ直チニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

証文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰レ傳年号月日身代限申付候ニ付此証文ハ入札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入其府縣管下某國某郡某村何ノ誰ヘ相渡候條此証書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上其段賞裁判所ヘ可届出事

年号月日

某裁判所印

訴訟用印紙之部

(廿七)民

明治十七年二月二十三日御布告第五号

民事訴訟用印紙規則

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通り制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス但シ明治八年十二月第九十六号布告訴訟用印紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス 右奉 勅旨布告候事

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス○第二條 訴狀ニハ正木一通ニ付請求ノ金額若シハ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘシ○金額價額五圓迄 二十錢○同十圓迄 三十錢○同二十圓迄 六十錢○同五十圓迄 一圓五十錢○同七十五圓迄 二圓二十錢○同百圓迄 三圓○同二百五十圓迄 六圓五十錢○同五百圓迄 十圓○同七百五十圓迄 十三圓○同千圓迄 十五圓○同二千五百圓迄 二十圓○同五千圓迄 二十五圓○同五千圓以上ハ千圓迄毎ニ二圓ヲ加フ○控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼スヘシ○第三條 人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

第十五

訴訟用印紙之部

百五十九

但シ人民ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戸長ノ証書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルヲアルヘシ○第四條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付二十錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ○答辯書証據物寫辯駁書辯論書上申書陳述書等証人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書審判ノ延期ヲ請求スル願書○第五條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付五十錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ○官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書財產差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書執行命令書ヲ請求スル願書身代限ノ處分ヲ請求スル願書○第六條 裁判官渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但シ裁判官渡書ノ謄本ハ壹枚十二行十二字詰其他ノ謄本ハ壹枚二十行ニ行十八字詰トス○第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ○第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償ス可キモノトス○第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム○第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ發賣スルコトヲ得ス○第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス仍ホ現在ノ印紙ヲ沒収ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒収ス○第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不倫罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

(廿八) 訴

訟用印紙種類及貼用方

明治十七年二月二十三日御布達第四号

今般第五号布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通り之ヲ定ム
 淡黑色印紙 一枚三錢、黑色印紙 同五錢、赭色印紙 同十錢、茶褐色印紙 同五十錢、黃色印紙 同一圓、青色印紙 同五圓、橙黃色印紙 同十圓、綠色印紙 同十五圓、橘栗色印紙 同二十圓○印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印スヘシ右布達候事

(廿九) 訴

訟用紙及代書賃ニ付御達

明治十七年三月五日司法省御達甲第一号

今般第五号布告ヲ以テ訴訟用野紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所ニ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺変ノ紙ヲ用ヒ一枚二十四行一行二十字詰ニ書スヘキモノトス但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五号布達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金二十錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ
 右告示候事

訴答文例之部

(三十) 訴

明治六年七月十七日御布告第二百四十七号

今般訴答文例并附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原被告人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

別冊

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハス 住所トハ某(府縣)管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商何渡世ト記スノ類 若シ一戸ノ本主ニアラスニテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄介ト記スヘシ○第二條
 第十五 訴答文例之部 百六十一

原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ文
通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルモ亦妨ケナシトス但シ役場文通ノ入費ハ原
告人ヨリ償フ可シ但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記
載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

第三條 原告人被告人訴狀答書及ヒ雙方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰ミ代書セシムル共
又ハ代書人ヲ用ヒテ自書スル共總テ本人ノ情願ニ任スヘキ事○第四條○第五條 (以
三ヶ條ハ明治七年第七十五
号御布告ヲ以テ改正削除)

第三章 訴狀之定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ從フ可シ○第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲ス
可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサル事ニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ブル
ヲ得ス○第二 (本項ハ明治七年第七十
五号御布告ヲ以テ削除)○第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス
ヘシ若シ自署スル不能ハサル時其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ○第四 訴狀ハ十六行コシテ
一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ムルコトヲ
得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ○第五 被告人
ノ住所呼出ヲ受クヘキ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ
記載スヘシ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルコト及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀 貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計
算ト貸渡シタル年月日ト標記シ次ニ証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返濟セサル事
情ヲ書スヘシ 田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱
人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ請取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ

照ス可シ但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣旨並ニ願意ヲ簡明ニ記載スヘシ
○第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀 預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預
ケタル年月日ト標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書ス
可シ 借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ賣家若シハ親族等ノ仕送り金ヲ受
取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ○第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀 賣掛代金淹滞ノ
訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ次ニ違約淹滞シタル事情
ヲ書ス可シ (本項中「被告人ノ証印アルコトヲ記入シ」ノ十三
字ハ明治十年第四十四号御布告ヲ以テ削除アリ) 賣掛代金云々 (本項モ明治十
年第四十四号
御布告ヲ以テ削除アリ)○第十條 手附金賣買違約ノ訴狀 諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ
殘金ヲ渡サントスル時ニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ
買附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取ルヘキ約定
期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ 諸物品ヲ
賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ルヘキ時ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、
ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡ス可キ
約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ○第十
一條 受負料淹滞ノ訴狀 諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト
受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ
寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ○第十二條 奉公人違約ノ訴狀 奉公人ニ年期ヲ約シ
前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスル訴狀モ住所氏名ノ次
ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ
次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ 職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未
滿内ニ其家ヲ出テ還サル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ 奉公人又ハ弟
子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ルヘキ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ○第十三

第十五 訴答文例之部

條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀 專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ模倣密賣スル者ヲ差留
メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト
專賣免許ノ年限トヲ標記シテ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シテ次ニ其密賣ノ事情ヲ書スヘ
シ 諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨ケアルヲ以テ他人ノ商業ヲ差
留ル事ヲ訴ルコトヲ得ス○第十四條 商社中取引之訴狀 商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人
對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合ヒ商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ
訴フルコトヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付各種ノ本條ニ照ス可シ 先キニ開キシ商社
後ニ開カントスル商社ノ妨ケルコトアルヲ以テ之ヲ訴フルコトヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯ス
ヲ得サルノ法ト相抵觸スルコトナカル可シ○第十五條 夫妻離別ノ訴狀 夫妻離別ノ訴狀
モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シテ次ニ其戶長役場ニ届置キタ
ル戶籍人別ヲ寫載シテ次ニ離婚ヲ爲スヘキ原由ヲ書ス可シ 原告人夫ナレハ其父母若シ父
母在ラザレハ祖父祖母父母アラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等親同等親在ラサ
レハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲ス可シ 原
告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴テ可シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ル暇
ナキ時ハ自ラ訴テ事ヲ得可シ○第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀 養子女ヲ離別スル
訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シテ
ニ原被双方ノ戶籍人別ヲ寫載シテ次ニ離別スヘキ原由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又
ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲ス可シ 本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴
狀モ本條ニ照ス可シ若シ本生父母在ラサル時ハ其親族ヨリ訴フルコトヲ得ヘシ 養子女ヨ
リ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フ爲スヲ得ス○第十七條 家督相續ノ訴狀 家
督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ノ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生
年トヲ標記シテ次ニ其原被双方ノ戶籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シテ次ニ

自己相續スヘキ條理ト被告人相續ス可キ條理ヲキテ書ス可シ○第十八條 田畑山林等
賣買違約ノ訴狀 田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取
戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ 田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡
シテ其代價ヲ受取ントスルノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ○第十九條 經界ヲ爭フ
ノ訴狀 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ
標記シテ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ 舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番号ヲ朱
記ス可シ 繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭
フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ但第七條但書ヲ見ル可シ○第二
十條 控告ノ訴狀 原告被告人豫審又ハ終審ノ裁判官渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上
等ノ裁判所ニ控告セントスル訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴狀ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼
出サレタル年度數其年月日ト訟廷ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記
載シテ次ニ其裁判官渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲
シ訴出ツヘシ (但書以下ハ明治八年第九十三號御 豫審又ハ云々 一號御布告上等裁判所
ニ依テ消ル)

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事
第二十一條 原告被告人共人員多少ニ拘ハラズ訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原
告人一名ニシテ全時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ
第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ヘキ事
第二十二條 貸借二事以上ニシテ原告被告人共別人ニ非ラサレハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以
上ヲ合スヲ得可シ
第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事
第二十三條 債主連名ノ証文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴テ可シ若シ債
主十五 訴答文例之部 百六十五

主連名三人ナルチ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ二人ヨリ依頼ノ証書ヲ以テ訴フ可シ○第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴フルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事
第二十五條 債主連名ノ借用証文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人数ヲ盡ク相手取ル可シ○第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人ノ名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載ス可シ○第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願モ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ス可シ

第九章 讓証文ヲ以テ訴ル事
第二十八條 ○第二十九條 但外國人ハ其本人ノ國法ニ從ヒ正シキ權ヲ得可シ (以上二ヶ條共但書ヲ除ク) 外明治九年第九十九號御布告ヲ以テ自ラ消滅ス

第十章 代書人ノ事
第三十條 ○第三十一條 (以上二ヶ條ハ明治九年第十八號御布告ヲ以テ廢止) ○第三十二條 (第三項) 訴狀中原告人又ハ代書人ノ疾病事故ニ因テ假リノ代書人ヲ出ス時ハ原告人又ハ代書人ヨリ假リノ代書人ヲ出スノ証書ヲ出スヘシ若シ証書ヲケレハ假リノ代書人ト爲スヲ許サズ (本條第三項ハ明治七年第七十五號御布告ヲ以テ自ラ消滅ス)

第二卷 被告人ノ答書
第一章 答書ノ定則ノ事
第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ○第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速クニ熟識シ原告人之ヲ許諾セ

ハ解脫ヲ請フ事ヲ得ヘシ (以下「其場合ニ於テハ代書人ヲシテ云々ノ」) ○第二 原告人ノ末文アレハ明治七年第七十五號ヲ以テ消滅ス

述ル所非理不實ニシテ辯解スヘキ確証アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書スヘシ○第三 (本項ハ明治七年第七十號御布告ヲ以テ消滅ス) ○第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユヘシ若シ本人自署スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ○第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字計ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

第二卷 被告人ノ答書
第二章 代書人ヲ用フル事
第三十四條 (本條ハ明治七年第七十號御布告ヲ以テ消滅ス)
第三章 代書人ノ事 (本章中代書人ノ事ハ明治九年第十八號御布告ヲ以テ廢止)
第三十五條 被告人ノ代書人ヲ用フルモ亦其情願ニ任ス然レモ必ス本人自カラ同伴シテ

訟廷ニ出席シ其結局ハ本人ヨリ決答ヲ爲ス可シ○第三十六條 被告人代書人ヲ出ス時ハ答書ノ與書及ヒ連印等ノ方法第三十條ニ照ス可シ○第三十七條 答書ニ關係スルノ書類ハ代書人又ハ保證人ノ類ト雖モ被告人ノ託ト爲ルヘキ者ハ被告人ノ撰ミタル代書人ヲシテ代書セシメ且ツ代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ被告人ノ自署ヲ用ユルヲ得ス 書面ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ若シ本人自署スルヲ能ハサルモ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第四章 原告人ノ返リ証文ヲ所有シタル答書ノ事
第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主元ノ証書ヲ返還セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ証文 (返証文ハ債主ヨリ原告ノ証書ヲ還附セシメ) ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書スヘシ○第三十九條 原告人米金等ヲ受取タルノ時ハ其米金ヲ受取リタルノミヲ証書ヲ以テ返リ証文ト爲スヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事
第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟識シテ返濟延期ノ第十五 訴答文例之部
百六十七

約ヲ結ヒ其証書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本証文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札(對談一札トハ返濟)アルヲ記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルヲ書ス可シ○第四十一條 債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本証文ニ據リ訴出タル原由アルキハ債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ証書ヲ以テ原告人破約ノ証ト爲スヲ得ス

第六章 原告人証書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 原告人ノ証書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ証スル爲メニ管轄(町村)ノ役場ニ届置キタル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト証書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ルヘキ米金アリテ其受取ルヘキ期限モ過キテ未タ訴ヘスト雖モ双方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ルヘキ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ○第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ己ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲スヘキ米金ヲ以テ乙某ニ返濟セン事ヲ答フルヲ許サス何ントナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辯解スルヲ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ○第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起リ解訟ノ答書ハ債主ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被双方ノ熟議ニ至リ又ハ更ニ改定ノ約定ヲ立タル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原告人對決前審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ全ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原告人對決前審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償セシメテ請ヒ原告人之承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ趣旨ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原告人對決前審判前被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センヲ請ヒ原告人之承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ全ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ

(訴答文例附錄ハ別ニ之ヲ掲グ)

明治十六年一月三十一日司法省御達甲第二号

本年第二号布告ヲ以テ始審裁判所管内ニ支應ヲ被置候ニ付テハ民事ノ訴訟ハ支應へ出訴スヘキモノト雖モ被告ノ承諾ヲ得タル上ハ其承諾書ヲ添始審裁判所へ出訴スルヲ得

第十五 訴答文例及治罪法之部 百六十九

(二)明治十六年第二号布告ニ付告示

但支那管内ニアル治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ニ於ケルモ本文下同シ
右告示候事

○第十六 治罪法之部

(一)治罪法 明治十三年七月十七日御布告第三十七号
治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事
別冊

治罪法目録

- 第一編 總則
- 第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限
- 第一章 通則
- 第二章 違警罪裁判所
- 第三章 輕罪裁判所
- 第四章 控訴裁判所
- 第五章 重罪裁判所
- 第六章 大審院
- 第七章 高等法院
- 第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審
- 第一章 捜査
- 第一節 告訴及ヒ告發
- 第二節 現行犯罪
- 第二章 起訴
- 第一節 檢察官ノ起訴
- 第二節 民事原告人ノ起訴
- 第三章 豫審
- 第一節 令狀
- 第二節 密室監禁
- 第三節 證據
- 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
- 第十六 治罪法之部

- 第五節 證據及ヒ物件差押
- 第六節 證人訊問
- 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- 第四章 豫審上訴
- 第四編 公判
- 第一章 通則
- 第二章 違警罪公判
- 第三章 輕罪公判
- 第四章 重罪公判
- 第五編 大審院ノ職務
- 第一章 上告
- 第二章 再審ノ訴
- 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
- 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ノ訴
- 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦
- 第一章 裁判執行
- 第二章 復權
- 第三章 特赦
- 治罪法目錄終

治罪法

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ証明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ヨリ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅セル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、ル場合ハ此限ニ在ラス ○又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並ヒ起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス ○刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去 ○二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和 ○三 確定裁判

治罪法 總則

判 ○四犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止 ○五大赦 ○六期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス
一被害者ノ棄權又ハ私和 ○二確定裁判 ○三期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ
一違警罪ハ六月 ○二輕罪ハ三年 ○三重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス ○公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又像審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ ○期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴像審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴像審又ハ公判ノ手續其規則ニ背サタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ効ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ理由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出タル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ルヲ得 ○被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ ○民事原告人像審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上述ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ルヲ得 ○要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡

アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得
第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヲ得但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス ○一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ ○嶋地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム
△參看 使丁規則ハ明治十四年司法省丁第廿六號達ニ就テ見ル可シ
若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ ○送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ ○同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若シハ是等ノ者之ヲ受取ルヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ

治罪法

總則 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限通則

速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ ○送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ
其二通ニ記載ス可シ ○本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ ○送達人ハ其一
通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ証トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其送
達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラズ

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ
每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フル能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ
背キタル時ハ其書類ノ効ナカル可シ ○官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印
ス可シ若シ署名捺印スル能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署
シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス
可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得
キ爲ノ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ効ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テハ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ
適用ス ○頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ
亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵触スル規則ハ此限ニ在ラズ ○從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫
審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラズ

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ス
第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一・裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス ○二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス ○三 裁判所ノ
命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス ○四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可
シ ○又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

一 違警罪ハ違警罪裁判所 ○二 輕罪ハ輕罪裁判所 ○三 重罪ハ重罪裁判所 ○重罪及ヒ輕罪又
ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上
等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時 ○二 數人通謀シテ日時又ハ場
所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時 ○三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免ル、爲
メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス ○犯罪
ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一個ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニ
テ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス ○數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非ザル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判
所ニ送致スヘシ ○令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

治罪法 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限 通則 違警罪裁判所 百七十七

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上逮捕スルコト許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 徒犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス ○數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス ○高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス ○闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所不明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ所ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テハ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヤヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコト不得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

△參看 明治十四年九月二十日第四十八号布告

刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

同年十月六日第五十四号布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候コ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノ

○限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコト得可シ此旨布告候事但シ本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事ノ之ヲ行フ ○判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

△參看 明治十四年十月十日司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事

同年十月司法省丙第十三号達署ス

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出スヘシ

○事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス ○又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ ○又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス ○又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコト得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス ○又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キコト命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ ○判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ブルコト不得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

治罪法 違警罪裁判所 輕罪裁判所 控訴裁判所

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一警視警部 ○二區長郡長 ○三治安判事 ○四警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ証憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコトアルヘシ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢察官ニ差出ス可シ ○又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ ○事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但シ其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス ○又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム ○裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルコトヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢察官又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢察官ニ屬スル司法警察官及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得 ○又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトアル可シ ○檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ ○又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク ○若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開應スルコトヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事ニ命ス ○二陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事ニ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第七十三條第二項ノ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相ヒ定メ候事

明治十四年十月三日第五十五號布告(全文ハ第七十九條ニ掲グルルヲ以テ參看セシコトヲ要ス)

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察官又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ ○始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢察官ヲシテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開應ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢察官ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ ○事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

治罪法 重罪裁判所 大審院 高等法院

一上告 ○二再審ノ訴 ○三裁判管轄ヲ定ムルノ訴 ○四公倣又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ
第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス ○判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ
△參看 明治十四年十月六日第五十五號布告
治罪法第七十二條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ
第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ
第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ ○事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院
第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス ○又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス ○又勅任官ノ犯シタル重罪輕罪ヲ裁判ス ○前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ關シ其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム
第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ
一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス ○二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス
第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ
第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヲ得
一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障 ○二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴 ○三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴
第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可シ
第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審
第一章 捜査
第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其証憑及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第九十三條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若シハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得 ○豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ ○檢察官告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ ○司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ ○違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可シ其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ ○又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得
第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ ○又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲ス可シ其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ ○告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ証書

治罪法 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審 捜査 告訴及ヒ告發 現行犯罪

第九十六條 告訴人ハ成ル可シ其証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ ○又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得
第九十七條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ ○又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲ス可シ其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ ○告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ証書

治罪法 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審 捜査 告訴及ヒ告發 現行犯罪

ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ ○告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可シ証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フヘシ ○違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラズ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發ス可シ ○告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス ○無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ既ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料ス可キ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時 ○二兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時 ○三家宅内ニ於テ犯罪シタル罪ヲ檢証スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ持メシテ被告人ヲ逮捕ス可シ ○違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ

氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第一百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ ○其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第一百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢証處分ヲ爲ス可シ

第一百五條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得
第一百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之レヲ巡查ニ引渡スコトヲ得
○被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ ○被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但シ逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サルハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第一百七條 檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ ○二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ ○三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ証據書類ニ意見ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ ○四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ ○被告人事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラズ

第一百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ
第一百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮

罰罪法

現行犯罪 起訴 檢察官ノ起訴 民事原告人ノ起訴 豫審

捕ス可キ人名及ヒ原被ノ証人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第一百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ ○豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス ○豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百一十條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判官渡アルマテ何時モ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得 ○又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得

第十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スコトヲ得 ○被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告訴ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第十五條 豫審判事ハ告訴被告ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾引狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ ○若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サハル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴被告ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢証處分ヲ爲シタル後証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ ○若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

第十七條 檢事ハ豫審中何時モ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ還付ス可シ ○又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ ○召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過シルコトヲ得ス

第十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
一 被告人定リタル住所アラサル時 ○二 被告人罪証ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時 ○三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ ○勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾引狀ヲ發スルニ非サレハ當然ニ之ヲ釋放ス可シ

第二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引

狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ ○其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヲ証明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第二百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若シ第二百二十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ ○檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ ○一被告人ノ概畧及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概畧 ○二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條 ○三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第二百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ ○又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印スヘシ ○勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第二百三十一條 召喚狀ハ第二百三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第二百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡査數人ニ分付フルコトアル可シ ○前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其勝手ヲ下付ス可シ此場合ニ於テ 第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第二百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若シハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ ○巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否ト 拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ ○家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告
治罪法第二百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候得共芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラス搜索致シ苦シカラス

第二百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知リ又ハ潛匿シタルト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得 ○巡查ハ被告人所在ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第二百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相發見ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得 ○請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第二百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第二百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヲ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヲ得 ○何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閱シテ被告人ヲ受取り其証書ヲ渡ス可シ

第二百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其事

治罪法 令狀 密室監禁 証據

甲ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ ○巡查ハ令狀ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取証書ヲ渡ス可シ

第三百二十九條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ原本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代理人ニ接見スルヲ得 ○書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置シ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス ○食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得 ○言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ ○豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナシ ○被告人ノ白狀官吏ノ檢証調書証據物件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官ノ事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ト

トナル証據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人証人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ ○裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ ○前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ ○書記又ハ立會人ナシシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ ○豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ ○書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

△參看 明治十年十二月司法省丙第十六號達

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從來ノ慣例ニ依リ押印爲致候儀ト心得可シ此旨相違候事

第五百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第五百十三條 被告人ハ陳述書ノ原本ヲ求ムルヲ得

第五百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ摸樣ヲ証スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人証人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第五百十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀ミ聞カス可シ ○第五百五十一條第五百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用

治罪法

証據被告人ノ訊問及ヒ對質檢証及ヒ物件差押

第五百五十六條 被告人又ハ對質人聲ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ
雙者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ ○被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ
第五百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ ○書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ
署名捺印ヤシム可シ ○第百九十二條第百九十三條第百九十四條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

五節 檢証及ヒ物件差押

△參看 明治十四年十二月司法省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢証及ヒ物件差押ノ事件ニ付キ急速ヲ要スル場合ニ巡査ヲ同行シ又ハ
所在ノ巡査ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ達置此旨相達候事

第五百五十八條 豫審判事ハ事對發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢証ヲ爲ス
可シ ○又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模倣ニ
付キ調書ヲ作ル可シ ○又被告人ノ利益ト爲ル可キ模倣ヲモ記載ス可シ

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模倣ニ因リ被告人ノ人違ナ
キヲ又ハ犯罪ノ模倣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲナシ目錄ヲ作ル可
シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ
閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所
ニ臨檢スルヲ得 ○被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在

第六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得 ○若
シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ら立會フヲ得但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ

此限ニ在ラズ ○民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其
立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ ○
物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ原本ヲ立會人ニ渡ス可シ ○其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載
ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ陳述ヲ聽ク事ヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立
會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ ○第七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラズ允許ヲ得スルニテ其場所ニ出入
スルヲ禁ズルヲ得 ○若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置ス
ルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑
託スルヲ得

△參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地
ノ司法警察官ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事
由ヲ通知シ被古人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若シハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ
物件ヲ受取開成スルヲ得但受取証書ヲ渡ス可シ ○前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官
署又ハ會社ニ還付スヘシ

第六節 証人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ
○原告証人被告証人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタ
ル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ

治罪法 檢証及ヒ物件差押 証人訊問

為必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス ○又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人トシテ之ヲ呼出スヲ得

△參看 明治十四年九月廿日第四十號布告

豫審又ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フ者アル時ハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之レヲ豫納セシム可シ ○若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシ

第百七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十二條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ ○若シ証人管轄地外ニアル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第百七十二條 豫審判事ハ証人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 ○若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 ○本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達スヘシ

△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告
治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

第百七十三條 呼出狀ニハ証人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ ○又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヲアル可キ旨ヲ記載ス可シ ○呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條 証人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヲ認可シ又ハ職務上已ムヲ得サル差支アル時ハ其事

由ヲ付シテ出廷延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

○豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但し其費用ハ証人ヲシテ之ヲ擔當セシム ○若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第百七十七條 豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヲ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヲ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スルヲ能ハサリシヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明ス可シ

第百七十九條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キ事ヲ宣誓セシム可シ ○豫審判事ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ ○宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

一 民事原告人 ○二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬 ○三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者 ○四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未満ノ幼者 ○二 知覺精神ノ不充ナル者 ○三 瘖啞者 ○四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者 ○五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者 ○六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴

治罪法 証人訊問 鑑定 百九十五

ヲ受ケ其証憑充分ナラサルコ因リ免訴ノ旨渡テ受ケタル者

第百八十三條 証人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ ○醫師藥商穩妥又ハ代言人辯護人代書人公証人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ他ノ証人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得 ○若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官証人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ証人ノ陳述ニ付各別ニ調書ヲ作ル可シ其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事・証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞セシム可シ ○証人ハ其陳述ヲ變更増減セシムルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ証人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ付記ス可シ

第百九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得 ○若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得 ○本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定
第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトス

ル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ
第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出 應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ ○鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス ○第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ ○書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置シ得

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得但急遽ノ際正當ニ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ ○若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ ○鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ ○又鑑定書ニハ豫審判事ノ受取タル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ ○鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ得

○外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置シ得

第百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審
第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ニ

治罪法 鑑定 現行犯ノ豫審

要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得 ○豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得
第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ (豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ)

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナシ其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得
第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ
第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

△參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告
治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候得共當分ノ内現行犯ノ場合ニ限 令狀ヲ發シ苦シカラス

司法警察官ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告ハト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ
第二百六條 檢事被告ノ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲモリ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ (若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ)
第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得
第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其旨ヲ通知スルヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訊問書ニ添付ス可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トモ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト愚料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫 中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニモ呼出ニ應ジ出廷ス可キノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得 ○被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得
第二百一 一條 前條ノ証書ハ書記局ニ差出ス可シ ○保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四

前ニ其報知ヲ爲ス可シ
第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出ス可シ ○又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ
第二百十五條 保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ ○若シ他人

ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ沒收ス可シ
第二百十六條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ ○又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ
第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕

治罪法

現行犯ノ豫審保釋豫審終結

罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ旨渡ヲ取消シタル時ハ保証金・還付ス可シ
第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告ハ其親屬又ハ
故舊ニ責付スルヲ得

△參看 明治十九年九月廿日第四十七號布告
第一條 被告人ノ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシム可キノ証書ヲ

裁判所書記局ニ差付サシムヘシ
第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時間前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消ス可
シ

第十章 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル
時ハ豫 終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ ○檢事ハ訴
訟書類ニ對シテ付シ三日内ニ之ヲ還付スルヲ得

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得
シ若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル旨渡ヲ以テ豫審ヲ終結
ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認メタル時ハ其旨ヲ旨渡ス可シ若シ勾
留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付
ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ旨渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免
ノ旨渡ヲ爲ス可シ ○二被告事件罪ト爲ラサル時 ○三公訴ノ期滿免除ト爲リタル
一犯罪ノ証憑充分ナラサル時

時 ○四確定裁判ヲ經タル時 ○五大赦アリタル時 ○六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時 ○本
條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シ且被告
人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ旨渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス可シ ○被
告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ旨渡ヲ爲ス可シ

○禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヲ得 ○若シ被告人未
タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス可シ若シ保
釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其旨渡ヲ取消ス可シ ○重罪裁判所ニ移スノ旨渡書ニハ控訴裁

判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ旨渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ ○管轄ニ非サルノ
旨渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ ○免訴ノ旨

渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其原由又犯罪ノ証憑充分ナ
ラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ ○違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス

ニハ犯罪ノ性質摸樣証憑ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ對ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ
第二百二十九條 前條ノ旨渡書ニハ第三百十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ旨渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但
是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其旨渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕
罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ旨渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ勾

留ヲ受クルニ非サレハ其旨渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス
第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民

事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十二條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
○又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲ス可シ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時 ○二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時 ○三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ササル時 ○四 越權ノ處分アル時 ○民事原告人ハ私訴ニ付キ

第二百三十九條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ ○故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ得 ○故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯其其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ ○會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行シ但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲ス可シ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時 ○二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時 ○三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖ヒ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其中立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ ○書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時

内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其中立人ヨリ故障ヲ爲ス可シ得 ○會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其中立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖ヒ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲ス可シ得 ○又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲ス可シ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲ス可シ得

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ ○回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖ヒ更ニ取調ヲ爲ス可シ得

第二百四十四條 書記ハ自ら回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ス若シ自ら回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルコトヲ得 ○檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其中立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可シ得 ○民事原告人ハ私訴ニ付越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可シ得 ○被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可シ得輕罪裁判所又ハ違僻罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲ス可シ得

治罪 豫審上訴

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス
 第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲カニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ ○故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ ○審記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可シ得
 第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲ス可シ得 ○附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可シ得
 第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋費付テ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セズ
 第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ
 第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ ○豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ其幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ ○又被告人ヲ保釋費付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可シ得
 第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ
 第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラカルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可シ得
 第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ ○檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ ○會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ
 第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ得
 第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フ可シ
 第二百五十九條 第三百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ ○檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ ○重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ
 第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但執ナル証憑アル時ハ此限ニ在ラズ ○新ナル証憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ ○裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得 ○又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得
 第二百六十三條 重罪輕罪違背罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサレ時ハ其言渡ノ效ナカル可シ
 第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辨論ノ傍聴ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聴ヲ許ス可シ
 第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置シテ得ル可シ ○禁

錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スニテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ
出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得 ○辯護人ハ裁判所々屬ノ代官ハ
中ヨリ之ヲ撰任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲ス
ヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨碍スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒
ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾
留スルコトヲ得 ○前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得 ○若
シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ
停止ス ○辯論ニ取掛タル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ
疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ
檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ ○若シ被告事件及ヒ法律ノ適
用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡
又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ証アルニ非レハ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ ○豫審終結ノ言渡
書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内
ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サズ但其親屬故舊ハ被告人ノ出
廷スルコト能ハサルノ事由ヲ証明スルコトヲ得 ○裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察
官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得
第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從
ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ ○稱讚誹謗其他
辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ
命令ニ因リ之ヲ取押へ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲
ス可シ ○書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付
キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ ○輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス
可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ証人ヲ訊問シ調書ヲ作
リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡
ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見
シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス ○若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必
要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルコトヲ得

第二百七十七條 檢察官被告ハ及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時
ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スコトヲ得 ○裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管
轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得
第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴
又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所
輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコトヲ得 ○豫
審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時
亦同

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得 ○忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ ○變災危難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得 ○是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得 ○豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得 ○豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ証人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接スルカラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス同シ
一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人 ○二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人 ○三 被告及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 証人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 証人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得ス ○陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得 ○訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ証人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ ○其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ ○本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス ○一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料 ○二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金 ○被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ ○其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷ズルヲ能ハザリシ正當ノ事由ヲ証明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得 ○檢察官自ラ其請求ヲ爲サル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但
呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ ○鑑定人ノ鑑定ニシテ事件ニ付
キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通ヤサル者ナル時ハ第五十六條第五十七條ノ規
則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ
訊問ノ順序ヲ定ム可シ ○裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變
更スルコトヲ得

第三百條 証憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ ○
檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス ○檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯
論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ放棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ
第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ
直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ
之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルコトヲ得 ○又民事原告
人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得 ○若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所
ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコ
トヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ証憑
ヲ明示ス可シ ○免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ証憑ナキコトヲ明示ス可シ
第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ ○私訴ニ付キ調取

未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得
第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ
擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ ○免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニ
テ之ヲ擔當ス可シ ○私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ取訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナ
シト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行
ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕コ就クニ非レハ上訴ヲ爲スコ
トヲ得ス

第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄
長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其
旨ヲ証明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免レ
タルヨリ通常ノ期限内其証據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス
コトヲ得 ○上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理
ス可キヤ否ヲ判決ス可シ ○上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係
人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ ○上訴ヲ受理ス可ラサル者ト判決シ
タル時ハ他ノ理由アルニ非レハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ
○裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ ○裁判言渡書ニハ其言渡
ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判官渡書ノ膠本又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ旨渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其旨渡ヲ受タル者ニ前條ノ請求及ヒ其旨渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ旨渡アリタル時ハ其旨渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ ○若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ ○一裁判官公行シタル又ハ傍聽ヲ禁スルノ旨渡アリタルヲ及ヒ其事由 ○二被告人ノ訊問及ヒ其陳述 ○三証人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サハル時ハ其事由 ○四原被ノ証據物件 ○五辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルト是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決 ○六辯論ノ順序及ヒ被告ハナシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外旨渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ ○辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルト記載ス可シ ○辯論中豫備判事ヲシテ代ラシタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ 檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判官渡ヨリ三日内ニ之ヲ整理シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ ○裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判官渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書局ニ保存ス可シ ○上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判官渡書及ヒ公判始末書ノ膠本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判
第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告以外ニ對シ發シタル呼出狀 ○二 豫審判事又ハ上等ノ裁判

所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ旨渡
第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムル事ヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未ダ其証人ヲ呼出サハル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ
第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢証處分ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ ○又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖ヒ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ証人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ ○官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ ○檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ ○若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ証憑ヲ差出ニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得 ○若シ白狀ナキ時ハ原被ノ証人ヲ訊問シ其他証憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ ○民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ ○被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人

治罪法

告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ ○民事原告人出廷セサル時亦同シ
 第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所
 ニ之ヲ送達ス可シ ○闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタル
 リ三日内ニ其申立ヲ書記局ニ差出ス可シ
 第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ
 者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルト及ヒ其事件ヲ公判ニ付テ可キ日時ヲ故障ノ對手人
 ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ ○又
 公判ニ付テ可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ
 第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ
 規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ ○其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲ス可キヲ得ス
 第三百三十五條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ ○又第二百
 二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
 第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
 第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ
 送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得
 第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ
 得

△參看 明治十四年九月第四十五號布告
 刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴
 訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシム可シ若シ豫納スルヲ能ハサル時ハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ
 許サス
 一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時 ○二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テ
 ノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時 ○三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載

シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時
 第三百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但シ其申立
 ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所
 ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス ○控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對
 手人ニ通知ス可シ
 第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致
 ス可シ ○若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意
 見書ヲ差出ス可シ
 第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル
 後其裁判ニ取掛ル可シ ○呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ ○証人ハ
 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
 第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶
 ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得
 第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ
 ○檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタ
 ル証人ヲ呼出スヲ得ス
 第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取
 消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ ○被告人ノ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡
 スヲ得ス ○私訴ニ付テハ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ
 第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ
 得
 △參看 明治十四年九月第四十四號布告

運警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從テ可シト雖トモ實際己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ヲ付テハ上訴ヲ許サス
同年九月第四十五号布告(全文ハ第二百二十八條ニ掲ケタルヲ以テ略ス)

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀 ○二豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムル事ヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ ○民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ ○民事原告人ハ被害事件ヲ証明ス可シ ○調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメテ次ニ原被証人ノ陳述ヲ聽キ且証據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

○被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ ○民事原告人ハ要領ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ ○被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期

滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時 ○二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時 ○三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ証アル時 ○第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル証人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命ジ若シハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ ○又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ ○又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ ○本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケタル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ ○訴訟書類及ヒ証據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ ○會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル証憑ヲ發見スルヲナシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ ○檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

治罪法 輕罪公判

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヲ得 ○又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ ○被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋實付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

△參看 明治十四年九月第四十五號布告(第三百二十八條參看)

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時 ○二被告人ハ違警罪ニ付テ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時 ○三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時 ○四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ得 ○闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニモ故障ヲ爲サズシテ直ニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百二十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢察官ノ控訴又ハ檢察官ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ罪罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス

可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

△參看 明治十四年九月第四十五號布告(第三百二十八條參看)

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ依テ公訴ヲ受理ス

一 像審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡 ○二控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ ○控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢察官公訴狀ヲ作ル可シ ○始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢察官公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢察官ニシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ摸樣 ○二被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地 ○三像審ニ於テ採取シタル原級ノ証憑 ○四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラズ

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヲ得

第三百七十七條 裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨

治罪法 輕罪公判 重罪公判

論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日午前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ撰任シタリヤ否ヲ問フ可シ

○若シ辯護人ヲ撰任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ撰任ス可シ ○被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護人ヲ撰任ス可シ ○辯護人ヲ撰任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若シハ被告人ヨリ之ヲ改撰ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ撰任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ撰任ス可シ但辯護人ヲ改撰シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ撰任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ ○辯論中辯護人ヲ改撰シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ ○第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲ得 ○又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得 ○辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判官渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受ケル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ ○被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内

○書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル証人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヲ得ズ但對手人ヨリ異議ナキヲ申出タル時ハ証人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百八十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開庭ス可キヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可シ

第三百八十七條 裁判官辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ ○裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ ○若シ其答辨ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル証人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ ○其呼出ニ應ジタル証人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ ○被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セヌ又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ ○被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サル可シ

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後証憑ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時

治罪法 重罪公判

ハ此限ニ任ラズ ○陪席判事檢察官被告人及ヒ民事被告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヲ得又証人ヲシテ他ノ証人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得 ○裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得
 第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其証人ノ陳述中被告入ヲ退席セシムルヲ得 ○裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公庭ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ
 第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其觀言書ヲ差出サシム可シ ○第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ ○被告入及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論スルヲ得
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告入辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得 ○檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
 ○裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ ○又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ ○又第四百一條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ ○又原被告ノ要領ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判官言渡ヲ爲ス可シ
 第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判官言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得
 第四百四條 關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被告証人ノ陳述ヲ聽ク可シ ○檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要領ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ ○民事擔當人ハ答辯スルヲ得
 第四百五條 關席裁判官言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本入又ハ其住所ニ送達ス可シ
 第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス ○民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判官言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ論スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ
 第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ ○重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ ○其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ
 第四百九條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ ○控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得
 △參看 明治十四年九月第四十五號布告(第三百二十八條參看)

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セザル時 ○二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時 ○三法律ニ背キ管轄違反ハ管轄ナリトノ言渡若シハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時 ○四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セザル時 ○五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セザル時

治罪法 重罪公判 大審院ノ職務 上告

○六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時 ○七裁判所ニ於テ請書ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事
 ○八裁判官言渡ヲ公行セズ又ハ傍聴ヲ禁スルノ旨渡ヲシテ訊問及
 ○九事實及ヒ法律ニ因リ言渡ノ理由ヲ付セズ又ハ其理由ノ阻礙アル時
 ○十擬律ノ錯誤アル時 ○十一越權ノ處分アル時
 第四百一十一條 免訴又ハ無罪ノ旨渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背
 キタルコト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコトヲ得ス
 第四百一十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對シ第四
 百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スコトヲ得
 第四百一十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得 ○大
 審院檢察長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得
 第四百一十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ旨渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判
 ニ付テハ旨渡アリタルヨリ起算ス
 第四百一十五條 豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋費付釋放及ヒ放免ノ旨渡ヲ
 除クノ外其執行ヲ停止ス
 第四百一十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其中立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ ○上告ノ申
 立書ハ其中立アリタルヨリ二十四時内ニ書記局ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ
 第四百一十七條 上告申立人ハ其中立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス
 可シ ○書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ
 第四百一十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出
 ス可シ ○書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ
 第四百一十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ一通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出し
 一通ヲ對手人ニ送達ス可シ ○私訴ノ裁判官言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又

ハ答辯書ニ付テモ亦同シ
 第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所
 ノ檢察官ニ差出ス可シ ○檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出し且意見アル時ハ之
 ヲ添フ可シ ○檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコトヲ院長ニ請求ス可シ
 第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代理人ヲ差出ス可シ ○重罪ノ刑ノ旨渡ヲ受ケタル
 者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ旨渡
 ヲ受ケタル者自ラ代理人ヲ撰任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代理人中ヨリ之ヲ撰任
 ス可シ
 第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ ○專任判事ハ一切ノ書類ヲ
 檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ
 第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由
 シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スコトヲ得 ○專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差
 出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ
 第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日内ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代理人ニ報知ス
 可シ
 第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ ○檢察長及ヒ代理人
 ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ ○私訴ノ上告ニ付テハ檢察長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ
 第四百二十六條 上告申立人及ヒ對手人ヨリ代理人ヲ差出サハル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ
 第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ旨渡ヲ爲ス可シ
 第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ理由アリトスル時
 ハ其旨渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル
 場合ハ此限ニ在ラズ
 第四百二十九條 擬律ノ錯誤若シハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判官渡

破毀シタル時ハ其事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判官渡ヲ爲ス可シ
第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、ル
時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シテ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラ
サル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判官渡ヲ爲シ又ハ
其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判官渡ヲ破毀シ直チニ裁判官渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ
他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判
所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス。○大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所
ノ裁判官渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シテ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタ
ル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判官渡確定シタル時ハ大審院檢察長ヨリ司法卿
ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得。○非常上告アリタル時ハ原裁判
官渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判官渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判官渡ニ對シテ檢察長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀
訴スルコトヲ得
一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時。○二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ
判決ヲ爲サ、ル時。○三 同一ノ裁判官渡ニ付キ二箇ノ條件阻礙シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判官渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス
可シ。○書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ
其答辯書ヲ差出ス可シ。○大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判官渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アル
マテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シテ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ
爲スコトヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル時其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ
生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確証アリタル時。○二 同一ノ事件ニ付キ其犯ニ非スシテ別
ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時。○三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ証書ヲ以テ當時其場
所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時。○四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリ
タル時。○五 公正ノ証書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ
一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官。○二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所
ノ檢察長。○三 大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ。○四 刑ノ言
渡ヲ受ケタル者。○五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラヌ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判官渡書ノ原本及ヒ証憑書類ヲ添
ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ。○原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審
院檢察長ニ差出ス可シ。○原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントス
ル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テ檢察長ノ請求ニヨリ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書
ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告
書及ヒ檢察長ノ意見書ニ因リ判決ヲ爲ス可シ

治罪法 再審ノ訴裁判管轄ヲ定ムルノ訴公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ理由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ ○其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ理由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トトキ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ理由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得 ○大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重要ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ他ノ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得 ○民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ ○書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ ○司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之レヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ依リ之ヲ爲ス可シ罰金料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

△參看明治十四年十二月司法省丁第二十五號達
治罪法第四百六十二條第二項罰金料費用及ヒ沒收物品ノ徵收ハ書記局ニ於テ之レヲ擔當シ會計主任ヘ引渡ス儀ト可心得此旨相達候事

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ
第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官

治罪法 裁判執行復權及ヒ特赦 裁判執行復權

吏ト共ニ署名捺印ス可シ ○其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム
第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記
既決犯罪表ヲ作り在ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シ
タル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地 ○二罪名刑名 ○三再犯 ○四裁判言渡ヲ爲シタル
年月日 ○五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置
ス可シ ○違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ
申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時
ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ ○裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認
定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ會テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ証
人ヲ呼出ス可シ

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見
ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規
則ニ從フ

第二章 復權
第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨ
リ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢察事ニ之ヲ
差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一裁判言渡書ノ謄本 ○二主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除トナリタルヲ証明スル書類 ○三假
出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書 ○四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレ
タルノ證書 ○五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢察事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁
判所檢察事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢察事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法
卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速
ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴
裁判所檢察事長ニ通知シ檢察事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察事ニ通知ス可シ ○前項ノ場
合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可シ

○更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢察事長ニ送致シ檢察
長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察事ニ送致ス可シ ○檢察事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス
可シ ○又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡
書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ口
シ司法卿ニ申立ルヲ得 ○監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ
意見書ヲ添フ可シ ○特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲ス可シ ○死刑ヲ
除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

治罪法 復權特赦

二百三十一

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ハ其旨ヲ通知ス可シ
第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

第十七 刑法之部

明治十三年七月十七日御布告第三十六号
刑法別冊之通改正候條此旨布告候事但實際施行之期日ハ遲テ布告スヘキ事
別冊

刑法目錄

- 第一編 總則
 - 第一章 法例
 - 第二章 刑例
 - 第一節 刑名
 - 第二節 主刑處分
 - 第三節 附加刑處分
 - 第四節 徵償處分
 - 第五節 刑期計算
 - 第六節 假出獄
 - 第七節 期滿免除
 - 第八節 復權
 - 第三章 加減例
 - 第四章 不論罪及ヒ減輕
 - 第一節 不論罪及ヒ減輕
 - 第二節 自首減輕
 - 第三節 酌量減輕
 - 第五章 再犯加重
 - 第六章 加減順序
 - 第七章 數罪併發
 - 第八章 數人共犯
 - 第一節 正犯

- 第二節 徒犯
- 第九章 未遂犯罪
- 第十章 親屬例
- 第二編 公益ニ關スル重罪輕罪
- 第一章 皇室ニ對スル罪
- 第二章 國事ニ關スル罪
 - 第一節 内亂ニ關スル罪
 - 第二節 外患ニ關スル罪
- 第三章 爵位ヲ害スル罪
 - 第一節 兇徒聚衆ノ罪
 - 第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
 - 第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪
 - 第四節 附加刑ノ執行ヲ通ル、罪
 - 第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪
 - 第六節 偽証ノ罪
 - 第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪
 - 第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪
 - 第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪
- 第四章 信用ヲ害スル罪
 - 第一節 貨幣ヲ偽造スル罪
 - 第二節 官印ヲ偽造スル罪
 - 第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

- 第四節 私印私書ヲ偽造スル罪
- 第五節 免狀鑑札及ヒ疾病証書ヲ偽造スル罪
- 第六節 偽証ノ罪
- 第七節 度量衡ヲ偽造スル罪
- 第八節 身分ヲ詐稱スル罪
- 第九節 公撰ノ投票ヲ偽造スル罪
- 第五章 健康ヲ害スル罪
 - 第一節 阿片烟ニ關スル罪
 - 第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪
 - 第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪
 - 第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪
 - 第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪
 - 第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪
- 第六章 風俗ヲ害スル罪
- 第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪
- 第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪
- 第九章 官吏瀆職ノ罪
 - 第一節 官吏公益ヲ害スル罪
 - 第二節 官吏人民ニ對スル罪
 - 第三節 官吏財産ニ對スル罪
- 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪
- 第一章 身體ニ對スル罪

- 第一節 謀殺故殺ノ罪
- 第二節 毆打創傷ノ罪
- 第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪
- 第四節 過失殺傷ノ罪
- 第五節 自殺ニ關スル罪
- 第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
- 第七節 脅迫ノ罪
- 第八節 墮胎ノ罪
- 第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
- 第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪
- 第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪
- 第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪
- 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪
- 第二章 財産ニ對スル罪
- 第一節 竊盜ノ罪
- 第二節 強盜ノ罪
- 第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪
- 第四節 家資分散ニ關スル罪
- 第五節 詐偽取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪
- 第六節 贓物ニ關スル罪
- 第七節 放火失火ノ罪
- 第八節 決水ノ罪

- 第九節 船舶ヲ覆没スル罪
- 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
- 第四編 違警罪

刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 法律ニ於テ罰ニ可キ罪別テ三種ト爲ス

一 重罪

二 輕罪

三 違警罪

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖凡之ヲ罰スルヲ得ス

第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一 死刑

二 無期徒刑

三 有期徒刑

四 無期徒刑

五 有期流刑

六 重懲役

七 輕懲役

八 重禁獄

九 輕禁獄

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一 重禁錮

二 輕禁錮

三 罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一 拘留

二 科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一 剝奪公權

二 停止公權

三 禁止治産

四 監視

五 罰金

六 沒収

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非レハ之ヲ行フヲ得ス

刑 法 刑例 刑名 主刑處分

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後二百日ヲ經ルコトヲサレハ刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス ○有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ツル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス ○有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルコトヲ得 ○有期流刑ノ囚三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ ○重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス ○重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス ○禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラス

第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス ○罰金ヲ禁錮ニ換フル者

ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過シルコトヲ得ス

○若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同ヲ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一國民ノ特權 ○二官吏ト爲ルノ權 ○三勳章年金位記賞號恩給ヲ有スルノ權 ○四外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權 ○五兵籍ニ入ルノ權 ○六裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス ○七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲ニスルハ此限ニ在ラス ○八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權 ○九學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フコトヲ停止ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行フコトヲ停止ス ○主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ムルコトヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間
監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルコトヲ得
ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタ
ル日ヨリ起算ス ○若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 監視ニ附セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セザル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮
ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタ
ル者ハ各其法律規則ニ從フ

一法律ニ於テ禁制シタル物件 ○二犯罪ノ用ニ供シタル物件 ○三犯罪ニ因テ得タル物件
第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯
罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第四節 徵償處分
第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ
定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠
償ヲ免カルコトヲ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判ス
ルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ
一年ト稱スルハ曆ニ從フ ○受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セ
ス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ
一犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判
宣告ノ日ヨリ起算ス ○二檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トチ分メス前判宣告ノ
日ヨリ起算ス ○三上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルコトヲ得
ス

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ悔改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經
過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スコトヲ得 ○無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後
亦同シ ○流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サルハト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得但本刑期
限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算
入スルコトヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第五十八條 刑ノ執行ヲ適レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

刑 法 刑期計算 假出獄 期滿免除 復權 加減例 二百四十三

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一死刑ハ三十年 ○二無期徒刑ハ二十五年 ○三有期徒流刑ハ二十年 ○四重懲役重禁獄ハ十五年 ○五輕懲役輕禁獄ハ十年 ○六禁錮罰金ハ七年 ○七拘留科料ハ一年

第六十條 例奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス ○附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得 ○沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラス

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ通レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ嗣後裁判ニ係ル者ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

第六十二條 刑ノ執行ヲ通レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得 ○主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス ○赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ら監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サンハ之ヲ得可カラズ

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑 ○二無期徒刑 ○三有期徒刑 ○四重懲役 ○五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑 ○二無期徒刑 ○三有期徒刑 ○四重禁獄 ○五輕禁獄

第六十九條

輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス ○輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重スヘキ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス ○輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルコトヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルコトヲ得

第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルコトヲ得

第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス ○違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルコトヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルコトヲ得減

シテ一日以下ニ降スコトヲ得ス科料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルコトヲ得減シテ五錢以下ニ降スコトヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止マ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ減輕

第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス ○天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス ○罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラズシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス ○罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルコトヲ得ス ○法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ヲ

シト爲スコトヲ得ス

刑 法 不論罪及ヒ減輕 不論罪及ヒ宥恕減輕 自意減輕 酌量減輕

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セズ

第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セズ但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六

歳ニ過サル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ

辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セズ但情狀ニ因リ滿二十歳ニ過サル時間之ヲ懲治場ニ留置

スルヲ得 ○若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十二條 瘡啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セズ但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場

ニ留置スルヲ得

第八十三條 違警罪ハ滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ス ○滿十二

歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歳ニ滿サル者及ヒ瘡啞者ハ其

罪ヲ論セズ

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節 自首減輕

第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故

殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニアラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減

等ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス

第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照

シテ處斷ス

第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節 酌量減輕

第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得

○法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヲ得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章 再犯加重

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年內

再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヲ得ス

第九十五條 刑期限內再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ

定役ニ服セサル者ヲ後ニ若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル

刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス ○罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從

ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章 加減順序

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑

名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ

以テ本刑トス

一 再犯加重 ○二 宥恕減輕 ○三 自首減輕 ○四 酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス ○重

罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス ○輕罪ノ

刑 再犯加重 加減順序 數罪俱發 數人共犯 正犯 從犯 二百四十七

刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス
第一百一條 違警罪ニ罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ

第一百二條 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セズ其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス ○若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セズ
第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從テ時ト雖モ其沒收及ヒ徵價ノ處分ハ各本法ニ從テ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第一百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス
第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス
第一百六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ボスヲ得ス
第一百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スヲ得ス
第一百八條 事ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト異ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス
一 所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止テ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス ○二 所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第一百九條 重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止テ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス
第一百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス ○正犯ノ身分

ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第九章 未遂犯罪

第一百一條 罪ヲ犯サントシテ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セズ

第一百二條 罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ゲタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第一百三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス ○輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス ○違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セズ

第十章 親屬例

第一百四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ
一 祖父母父母夫妻 ○二 子孫及ヒ其配偶者 ○三 兄弟姊妹及ヒ其配偶者 ○四 兄弟姊妹ノ子及ヒ其配偶者 ○五 父母ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者 ○六 父母ノ兄弟姊妹ノ子 ○七 配偶者ノ祖父母父母 ○八 配偶者ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者 ○九 配偶者ノ兄弟姊妹ノ子 ○十 配偶者ノ父母ノ兄弟姊妹
第一百五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姊妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姊妹同シ ○養子其養家ニ於テ親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第一百六條 天皇皇后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス
第一百七條 天皇皇后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

刑 法

未遂犯罪 親屬例 公益ニ關スル重罪輕罪 皇室ニ對スル罪 國事ニ關スル罪

第一百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第一百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第一百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第一百二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他憲法ヲ紊亂スルヲ目的ト爲シ内亂ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ敬峻者ハ死刑ニ處ス ○二 群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス ○三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁錮ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁錮ニ處ス ○四 敬峻ニ乘シテ附加隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第一百二十二條 内亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ己ニ内亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第一百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ内亂ト同ク論シ其敬峻者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第一百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第一百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第三百一十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス ○内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第一百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第一百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第一百二十八條 内亂ニ乘シテ人ノ身體財産ニ對シ内亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第一百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第一百三十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船舶其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第一百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス ○敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第一百三十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第一百三十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第一百三十四條 外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第一百三十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第一百三十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ說諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ敬峻者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百三十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ヲ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シ

刑 法 靜謐ヲ害スル罪

タル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其
情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
第三百三十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若シシクハ家屋船舶倉庫ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火
ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス ○首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第三百二十九條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴
行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ
罰金ヲ附加ス ○暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ
第四百十條 治條ノ罪ヲ犯シ囚テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キ
ニ從テ處斷ス

第四百十一條

官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一
年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書
圖書又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ獄舎獄具ヲ
毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス
第四百十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者
ハ再犯ヲ以テ論ス

第四百十四條

未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第四百十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル
時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十五條

囚徒二人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第四百十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百十六條

囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者
ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○囚テ囚徒ノ逃走ヲ

致シタル時ハ一等ヲ加フ

第四百十七條

囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ
重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル
時ハ輕懲役ニ處ス

第四百十八條

囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第四百十九條

前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ
處斷ス

第四百十條

看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金
ニ處ス ○若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十一條

犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルヲ知テ之ヲ藏匿シ若シハ
隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
○若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第四百十二條

他人ノ罪ヲ免カレシメノヲ圖リ其罪証トナル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日
以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十三條

前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四百十四條

公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上
一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十五條

監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處
ス

第四百十六條

前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第四百十七條

私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪
官名ヲ受ケス又ハ官誥ヲ得スニテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品

ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ ○前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止テ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十條 第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十一條 第百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪
第百六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第百六十五條 濠車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐偽ノ標識ヲ顯示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第百六十八條 第百六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百六十九條 第百六十五條第百六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ濠車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆沒シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第百七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪
第百七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル時 ○二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ攜帶シテ入りタル時 ○三 暴行ヲ爲シテ入りタル時 ○四 二人以上ニテ入りタル時

第百七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪
第百七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサルト時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪
刑 法 靜謐ヲ害スル罪 信用ヲ害スル罪
二百五十五

第七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應シタル者ハ第二十三條ノ例ニ照シテ處斷ス

第七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分拆又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十條 裁判所ヨリ證人トシテ証據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ

第八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ檢査シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス ○獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章 信用ヲ害スル罪
第一節 貨幣ヲ偽造スル罪
第八十二條 內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス ○若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第八十三條 內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス ○若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若シハ變造シテ行使シタル者ハ内外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十五條 內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス ○若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス ○若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各二等ヲ減ス

第八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇テ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス ○若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス ○其未タ行使セサル者 各三等ヲ減ス

第九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス ○若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第九十三條 貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルコトヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額ニ倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

刑 法 信用ヲ害スル罪

第九十四條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第九十五條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス ○書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上

三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百九十七條 御國國印記載印章ノ影贖ヲ盗用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照

シ各一等ヲ減ス ○若シ看守者自ヲ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ

第二百九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使

用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以

下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二百條 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス ○其詔書ヲ毀棄シタル者亦

同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス ○其官ノ文書ヲ

毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債証書地券其他官吏ノ公証シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ

輕懲役ニ處ス ○若シ無記名ノ公債証書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノニ照シ例

各一等ヲ加フ ○其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ依テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照

シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監

視ニ付ス

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シ私用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五

十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ二等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ買賣ス可キ証書若シハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ

又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス ○其手形証書ニ詐僞ノ裏書ヲ爲シテ行使シタ

ル者亦同シ

第二百十條 買賣貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル証書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル

者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○其餘ノ私書ヲ偽

造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ

罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處

斷ス

刑 法 信用ヲ害スル罪

ケテ其詐偽ノ証書ヲ作りタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ
第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ証書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽証ノ罪
第二百十八條 刑事ニ關スル証人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽証ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス
一重罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
○二重罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
○三違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽証ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽証者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽証ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス
一重罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
○二重罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
○三違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽証ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽証ノ罪發覺シタル時ハ偽証者ヲ其刑ニ反坐シ若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽証ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス○其刑期限内ニ於テ偽証ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヲ得但減シテ前條偽証ノ刑ヨリ降スコトヲ得ス
第二百二十二條 偽証ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス○若シ被告人死刑ニ陥ルノ目的ヲ以テ偽証ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽証ヲ爲シタル者ハ一月以下一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ前條ニ記載シタル偽証ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽証又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽証ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス○若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若シハ内外國ノ勳章ヲ借用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

刑 法 信用ヲ害スル罪 健康ヲ害スル罪

第九節 公擧ノ投票ヲ偽造ナル罪

第二百三十三條 公擧ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲シメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調査ヲ作り投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐僞ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 税關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス ○人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ

十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スコトヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他所ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他所ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條 官許ヲ得ズシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス ○若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照ラシ重キニ從テ處斷ス

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

刑 法 健康ヲ害スル罪風俗ヲ害スル罪死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條 官許ヲ得ズシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章 風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條 公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二百五十九條 風俗ヲ害スル冊子圖書其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス ○賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス
 第二百六十二條 財物ヲ醜集シ富強ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス ○若ハ脱教又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス ○
 第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪
 第二百六十四條 埋葬可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ二月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ
 第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變ヒシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變ヒシムル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ
 第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ毀壞其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第九章 官吏瀆職ノ罪
 第一節 官吏公益ヲ害スル罪
 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪 官吏瀆職ノ罪

第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セス又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一月以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條 人ノ身體財産ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セスシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過ルル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若シハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セザル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十一條 囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十二條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解リコト怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十三條 裁判官檢察官故ナシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受テ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十六條 裁判官檢察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十七條 裁判官檢察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カレ又ハ怨ヲ挾サミ被告

人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂既ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ看守スル所ノ金銀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

○因テ官ノ改書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

刑 法 官吏瀆職ノ罪 身體財産ニ對スル重罪輕罪 身體ニ對スル罪

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵収スル官吏正數外ノ金銀ヲ徵収シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詭稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀殺故殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其面目ヲ瞎シ其兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷テ陰陽ヲ毀敗シ若シハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

○其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癱疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムニ能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

○其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ六月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

○疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癱疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス

○若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハザル時、其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但救唆者ハ減等ノ限リニ在ラス

第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ助助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詭稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪

第三百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受ケルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十條 毆打ヲ互ニ創傷シ其手下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヲ得

第三百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條 姦間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若シハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ

防止スル爲メ之ヲ殺傷タル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕スヘキ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ已ムテ得サルコト出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシテ他人ノ爲メナルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムテ得サルコト出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス
一財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時 ○二盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時 ○三夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第三百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムテ得サルコト非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ尙ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱瘓疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ三圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十三條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス

二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過ケル者ハ一等ヲ加フ

第三百二十三條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節 脅迫ノ罪

第三百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○毆打創傷其他暴行ヲ加ヘ

ノ脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セント脅迫シタル者ハ十一月以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十七條 兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第三百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師藥師又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ驅逐シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス
第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎コ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス ○其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス
第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス ○白テ生活スルコト能ハサル老者疾病自テ遺棄シタル者亦同シ
第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ空闊無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス
第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保護ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加テ

第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癡疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ癡疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス
第四百十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルコトヲ知テ之ヲ扶助セズ又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコトヲ知テ扶助セズ又ハ申告セサル者亦同シ
第十節 幼者ヲ畧取誘拐スル罪
第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以下百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○其誘拐シテ自ラ

藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第三百四十三條 略取誘拐シタル幼者ナルコトヲ知テ自己ノ家屬僕婢ト爲シ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス
第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但畧取誘拐セラレタル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ効ナシ
第三百四十五條 二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス
第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪
第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第三百四十八條 十二歳以上ノ男女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス ○藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス
第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處シ若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ癡篤疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス
第三百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ
○此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ効ナシ
第三百五十四條 配偶者アル者重テ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓
以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪
第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽証ノ例ニ照シ
テ處斷ス

第三百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑
ヲ死ス

第三百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載
シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條 惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハズ左ノ例ニ照シテ處
斷ス
一公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以
下ノ罰金ヲ附加ス ○二書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶條ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日
以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條 死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ
得ス

第三百六十條 醫藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受
ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ
處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在
ラス

第三百六十一條 此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
第十三節 祖父父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條 子孫其祖父父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス ○其自殺ニ關スル罪ハ
人ノ刑ニ照シニ等ヲ加フ

第三百六十三條 子孫其祖父父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シク
ル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シニ等ヲ加フ但シ癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ
篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條 子孫其祖父父母ニ對シ衣食ヲ供給セズ其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五
日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○因テ疾病又ハ死ニ致シ
タル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條 祖父父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス
但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章 財産ニ對スル罪
第一節 竊盜ノ罪
第三百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處
ス

第三百六十八條 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ錠鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦
前條ニ同シ

第三百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條 兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條 自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守
シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條 田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ
處ス

第二百七十三條 山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若

クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ又前條ニ同シ

第二百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ

處斷ス

第二百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付

ス

第二百七十七條 祖父母父母夫妻孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル

者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス ○若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分ナタル者ハ竊盜ヲ以テ論

第二節 強盜ノ罪

第二百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處

ス

第二百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎コ一等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時 ○二兇器ヲ携帶シテ犯シタル時

第二百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第二百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

第二百八十三條 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ

處ス

第二百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第二百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セズ又ハ官署ニ申告セサル者

ハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其

罪ヲ論セズ

第四節 家資分散ニ關スル罪

第二百八十八條 家資分散ノ際其財產ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ增加シタル者ハ二月以上四

年以下ノ重禁錮ニ處ス ○情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減

ス

第二百八十九條 家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人

ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第二百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ証書類ヲ騙取シタル者ハ詐取財ノ罪ト爲シ

二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○因テ官私ノ文書ヲ偽

造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百九十一條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ証書類ヲ授與セ

シタル者ハ詐取財ヲ以テ論ス

第二百九十二條 物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交付シタ

ル者ハ詐取財ヲ以テ論ス

第二百九十三條 他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐取財

ヲ以テ論ス ○自己ノ不動産ト雖モ已ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重子

ヲ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第二百九十四條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス ○若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官廳ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家畜分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セズ

第六節 贓物ニ關スル罪
第三百九十九條 強竊盜ノ贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故賣シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一條 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七節 放火失火ノ罪
第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百四條 火ヲ放テ廢屋及柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶漁車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス ○其人ヲ乘載セザル船舶漁車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條 火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財產ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條 火藥其他激發スヘキ物品又ハ煤氣非蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財產ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分テ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節 決水ノ罪
第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス ○若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節 船舶ヲ覆没スル罪
第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船中ニ亡キ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス ○因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ圍池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

シ又ハ五圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第四百二十條 土地ノ境界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀壞シタル者ハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第四百二十二條 他人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
 第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編 違警罪

第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九角五分以下ノ科料ニ處ス
 一 規則ヲ遵守セズシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者
 二 規則ヲ遵守セズシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者
 三 官許ヲ得ズシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者
 四 人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者
 五 蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者
 六 官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サ、レ者
 七 官許ヲ得ズシテ死屍ヲ解剖シタル者
 八 自己ノ所有地内ニ死屍アルコトヲ知テ官署ニ申告セズ又ハ他所ニ移シタル者
 九 人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十 密ニ賈淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

△參着明治十四年十二月九日第六十四號布告

密賣淫ノ儀ハ刑法第四百二十五條第十項ニ明文有之候ヘトモ當分ノ内其取締懲罰ハ從前ノ遵東京ハ警視廳其他ハ地方官ニ委任ス

- 十一 一人ノ住居セサル家屋内ニ潜伏シタル者
- 十二 定リタル住居ナシ平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者
- 十三 官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者
- 十四 違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者但被告ハ偽証ノ爲メ刑ヲ免レタル時ハ第二百九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五拾錢以上一圓五拾錢以下ノ科料ニ處ス

- 一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者
- 二 水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦スヘキノ求メテ受ケ傍觀シテ之ヲ肯セサル者
- 三 不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者
- 四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者
- 五 人ノ通行ス可キ場處ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サ、ル者
- 六 路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ放シ又ハ驚逸セシメタル者
- 七 發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者
- 八 狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者
- 九 變死人ノ檢視ヲ受ケズシテ埋葬シタル者
- 十 墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚穢シタル者
- 十一 神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者
- 十二 公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但斥ヲ待テ其罪ヲ論ス

刑 法 違警罪